筑波大学新聞

第308号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市天王台1－1－1

学制といじめに相関関係

「5344」制へ移行を

清水一彦 副学長

今後の学制改革の在り方について、本学の清水一彦副学長（教育学）が本紙の取材に応じ、現行の「6334」制【🔍】を早急に廃止し、「5344」制に移行すべきとの見解を明らかにした。同副学長の研究グループが近年、小中学生約5000人を対象に行った調査に基づくもので、「5344」制の場合、小中学校でのいじめ減少が期待される一方、高校の進路教育に深みが出る可能性も高い。政府自民党は、平成の学制大改革」に向けた議論を進めており、同副学長の見解は今後、注目されそうだ。（倉沢美紀＝国際総合学類3年）

「平成の学制改革」に影響も

文部科学省の1985年からの統計では、いじめの発生率は小学校から上昇し、中学1年でピークに達するというデータが出ており、調査開始時から現在までこの傾向は一貫している。

副学長らの研究グループは「学制といじめ発生には何らかの関係がある」と考え、2006年、ある県の小中学生を対象にアンケート調査を行った。この結果、いじめの被害者や加害者は大部分が学校の授業についていけなかったり、友達ができなかったりして学校環境にうまく適応できていないことが分かった。

更に、副学長によればこれらの背景には近年の思春期の低年齢化や、小中学校での教育方式の違いがあるという。例えば、6334制の導入時と異なり、現在は子供の成長が早く、小6～中2で思春期を迎える場合が多い。だが現制度ではこの時期に中学進学を挟むため、新たな生活環境の変化に加え、学級担任制（小学校）から教科担当制（中学校）と教育方式も大幅に変わり、混乱する子供は多いという。

副学長はこれらの状況から思春期の子供たちの心の状態が不安定になり、中1をピークとするいじめの発生を助長している可能性が高いと指摘。小学校を5年、中学校を3年にすれば「思春期の子供たちを同じ学校で教育できる上、早めに中学の教育システムに慣れることができる」と話す。

副学長によると、米国でも子供の発達状況を配慮し、教育の継続性を保つという観点から何度か学制改職業理解を深め、進学の場合は大学教育への橋渡しの役割が求められている」と発言。だが、現在の高校教育はその役目を十分果たしておらず、就職・進学後に職業、大学との「ミスマッチ」に気づくケースも多い。副学長は「高校の期間を1年増やすことで、現在不十分なキャリア教育や進学教育を行う時間が確保できる」とも話している。

結果、現在では全国的に5344制が主流となっている。またいじめを減らすために学校制度を変えた州などもあるという。

一方、副学長は高校教育について、「就職の場合は職業理解を深め、進学の場

◆「6334」制＝小学6年、中学3年、高校3年、大学4年と定められた学校制度で、日本の教育機関は一般的にこの制度に基づく。戦後の学制改革で導入されたが、自民党は政権公約の一つに6334制を見直し、「平成の学制大改革」を行うことを挙げており、議論が進められている。

大学間ネットワーク構築

クラウドソーシング 大きな仕事を小さく分ける

森嶋厚行 教授

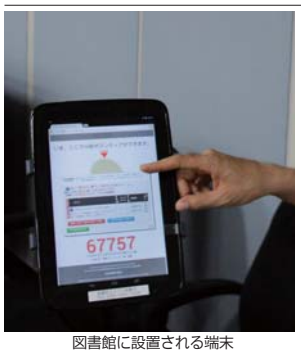
ネットを通じて不特定多数の人に小さな作業を割り振り、最終的に大規模な仕事を遂行する「クラウドソーシング」の研究が、本学で大きな進展を見せている。日本の研究の第一人者・森嶋厚行教授（図情メ系）が昨年10月、世界に先駆ける形で大学間の非営利ネットワークを構築。国立国会図書館と連携して、書誌情報のチェックに乗り出すなど、実用化に動き出した。現在、国内16大学、海外2研究機関の研究者が協力しており、今後ネットワークの規模を拡大する一方、企業との提携も進める方針だ。（原啓一郎＝社会学類3年）

コンピューターは記憶能力などでは優れるが、例えば同じ著者名でも、本の題名が「アウトドアライフ・自然の恵みとつきあう」として登録された場合と、単に「アウトドアライフ」として登録された場合は、これらが同じ本か判断できない。だが人間の場合、二つが同じ本である可能性を指摘できる。コンピューターと違い、全体状況を見渡す判断力に優れるからだ。

クラウドソーシングはこのような人間の特性を利用するもので、同教授の研究室は2011年10月以降、「Crowd4U」というサイトを公開。国立国会図書館と連携し、書誌情報のチェックに乗り出した。出版された書籍は、異なる本が同じ本として登録される場合があり、これらの「疑わしい」書名をネット上で公開。ボランティアが「人間の目」で同じ本かどうか判断する。

参加方法は簡単で、同サイトや参加大学の研究者のHPなどに接続すると、重複登録された可能性がある似た題名／著者名などの本が複数ポップアップし、同一の本かどうか判断を求める。短時間で誰でもできる簡単な作業な上、多数が参加することで、膨大な書誌情報の品質が向上する。

Crowd4Uのネットワークには提携大学、機関の研究者や学生が参加。この半年間で書誌情報のチェック2万5000件などを行ってきた。災害時の利用でも研究を進めており、昨年5月につくば市で発生した竜巻に関して、現地の人が撮影した地上写真と、衛星写真をサイト上に並べ、「どこの地上写真は、衛星写真のどこに合致するか」と質問。竜巻のルート分析を迅速に行う研究を行った。同教授は「潜在能力が非常に高い技術で、公益利用に加え、ビジネスモデルも作っていきたい」と話している。今後、各大学の図書館などに専用端末を置き、参加者増加も狙うという。



図書館に設置される端末

紙面から

カンボジア北西部　レーザー光で遺跡発見　2
手塚治虫文化賞　山本さん　新生賞受賞　3
バレー　女子　東日本インカレ4位　8
なでしこ　プロ選手と子供たちが交流　9
忍び込み犯逮捕　連続発生沈静化　10
セグウェイ　キャンパスツアーに導入　11
ミニ特集　5
第39回宿舎祭　晴天に恵まれた2日間
特集　6,7
本学から　就職活動を問う

脳の状態と睡眠の関係解明

興奮が眠りの妨げに

睡眠前の脳の状態が、眠りにつくまでの時間に影響を与えることを柳沢正史教授（国際統合睡眠医科学研究機構）らの研究グループが突き止め、発表した。研究で、「睡眠前に興奮すると眠れなくなる」という人の経験的な感覚が、科学的に裏付けられたことになる。

マウスは新しい環境に置かれると周囲を探索する性質を持つ。この性質を前提に一方のマウスに対しては1時間ごとに巣箱を交換、新しい環境を与え続けた。別のマウスには、なべたり巣箱をたたいたりして無理矢理起こすことを続けた。この2種類の方法でマウスの睡眠を6時間妨げ、その後眠りにつくまでの時間と脳が要求する睡眠の必要量を計測した。

実験の結果、双方のマウスが必要とする睡眠量はほとんど同じだった。だが、新しい環境を与えられたマウスの方が眠りにつくまでの時間が長く、眠りたい意欲（眠気）が弱いことが判明。どちらも睡眠を妨げられていた時間が同じだったことから、周囲を探索するという脳の活発な活動が、眠りにつくまでの時間を長引かせている可能性があることが分かった。柳沢教授は「実験結果で）不眠治療の際に行う『就寝前は運動など脳が興奮することはしないほうが良い』というような生活指導の有効性が示された」と話している。

また、これまでは眠気が強くなると睡眠の必要量も多くなると考えられていた。だが、2種類のマウスの眠気には差がありながら、必要とする睡眠量は同じだったため、その定説を覆す結果となった。

柳沢教授は眠気の実体や、それがどのように制御されるかなどを解明することで、睡眠の謎を解いてみたい、と意欲を語った。

つくば歳時記

5月22日、栗原小学校の5年生が田植えに挑戦。泥だらけになりながら、苗を一つひとつ丁寧に植えた。おいしいお米が、たくさんできるといいな。（撮影・望月麗＝比較文化学類2年）

筑波おろし

韓国から留学して3年目。言語や文化の違いもあり、日本人との交流は難しいと考えていたが、それでも何とかしたかった。学問だけではなく、その国の文化や社会に近づくことも留学の目的で、人生の大きな糧になると考えたためだ▼昔から人物写真を撮るのが趣味だ。知り合いを通して学内で男女問わずモデルを探し、写真を撮る。その中で知り合いがどんどん増えていった。交流の中で、留学前には知らなかった日本の文化を少しずつ肌で感じるようになった▼だが、気になったのは写真を通じて知り合った多くの学生が、「自分の学類は他の学類と交流があまり無く、他学類の知り合いは少ない」と話すことだった。「友達は作りたいけど面倒くさいし、時間も無い」。周囲の友達は口々に言った。勉強やサークル、バイトで忙しいためだそうだ▼17世紀スペインの哲学者、バルタザール・グラシアンが残した「一人の友達を持つことはまた一つの人生を持つこと」という名言がある。人は誰もが自分だけの特別な世界を持っている。友達を増やせば自分の世界がどんどん広がっていく▼本学には、それぞれ異なる特徴を持つ学群・学類があり、そこには世界から集まった、約1万人の学生もいる。たくさんの「世界」に接し、自分の世界を広げるチャンスが、ここにはある。

カンボジア北西部

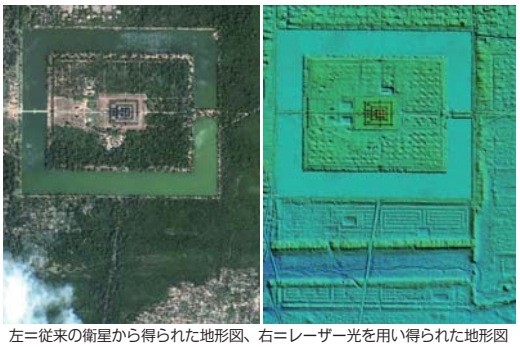
レーザー光で古代遺跡を発見

高度な都市構造を備える

下田一太助教（芸術系）は6月28日、カンボジア北西部のアンコール遺跡群から約30キロメートル離れた場所に古代遺跡を見つけたと発表した。

発見された遺跡は、古代クメール王朝の最初の首都であった可能性があり、高度な技術を持つ都市であったと推測される。

また12世紀半ばから首都の中心地とされた「アンコール・トム」では都市の外側にも格子状の水路や遺跡が発見され、これまで分かっていない遺跡の面積の4倍ほどの広さがあるという。



左＝従来の衛星から得られた地形図、右＝レーザー光を用い得られた地形図

「マヘンドラパルバタ」のものとされる。碑文などにその存在が記され、点在するレンガ造りの寺院なども確認されていたものの、一体が密林に覆われていたり、地雷が存在するなどの状況から調査が進んでいなかった。

今回の調査は日本を含む7カ国8組織による共同事業で、レーザー光による測定装置「ライダー」を用いて行われた。ヘリコプターからレーザーを照射し、地表から跳ね返ってきた光のデータを抜き出すことで、正確な地形が分かるという。

その結果、地表に起伏がある約30平方キロメートルの範囲に、多数のため池や水路が整備されているのを発見。碁盤の目のようなかんがいシステムを備えていたことなどが確認された。

これらの発見は従来の研究結果を一新するものだが、これらの都市構造が作られた目的や、利用の実態については不明。下田助教は「今が調査のスタートライン。まだ明らかになっていない部分を今後の調査で解明したい」と話した。

鬼頭主幹研究員らの研究グループ

ハワイのハリケーン数を予測

今世紀末には約3倍に

鬼頭昭雄主幹研究員（生環系）らの研究チームは5月6日に、今世紀末の2075～99年の25年間にハワイに接近するハリケーンの数が1979～2003年の25年間の約3倍になるとの予測を発表した。ハリケーンはハワイが属する北東太平洋などで発生する熱帯低気圧。温かい海水によって暖められた空気が上昇気流を作り、そこに周囲の暖かい空気が流れ込み暴風となる。1979～2003年の間にハワイに接近するハリケーンは8個だった。

今回の研究は、気候変動の予測技術向上などを目的として文部科学省が主導する「気候変動リスク情報創生プログラム」の一環として行われた。同研究チームは地球温暖化など世界規模で起こる現象をシミュレーションできる独立行政法人海洋研究開発機構横浜研究所（横浜市金沢区）のスーパーコンピューター「地球シミュレータ」を利用し、ハワイに接近するハリケーンの数の将来的な変化を調べた。

その結果、ハワイ南東で発生したハリケーンは地球温暖化の影響で勢力が弱まりにくくなる上、消滅する前に西向きの風の影響を受けてハワイ付近へ接近しやすくなることを突き止めた。

研究では海面水温や湿度などの将来変化の様子など気候変動のさまざまなケースを想定してシミュレーションを行ったため、予測結果の信頼性は高いという。

鬼頭主幹研究員は「これからは台風や土砂崩れなどをより正確に予測し、その結果を災害対策などに応用しやすくしていきたい」と今後の抱負を語った。

本学附属病院とクックパッドが共同開発

糖尿病患者向け献立考案

ネットで無料公開始まる

本学附属病院と料理レシピサイト「クックパッド」を運営するクックパッド株式会社が共同で糖尿病患者向けの献立を開発し、6月12日から同サイトの「健康レシピ・糖尿病」のページで無料公開を始めた。

クックパッドは利用者が料理のレシピを投稿するサイトで、主婦を中心に人気が高い。今回の研究では投稿された140万以上のレシピの中から「おいしい」というコメントが多いものや人気の高いものを厳選。栄養士らと研究グループがそのレシピを基に実際に調理し、栄養と味のバランスを調整した上で「ヘルシーでおいしい」献立として公開した。糖尿病治療には脂肪の摂取量を減らすことが重要であるため、調理に使う油の量を減らしたり、食材を変えるなどの工夫がされている。

レシピには作り方の他、カロリーや栄養素、栄養士のアドバイスも掲載されている。今後も患者や家族からの意見も反映し、定期的に更新していく予定だ。

研究を主導した矢作直也准教授（医学医療系）は「糖尿病治療には食事療法が必要不可欠。病院での治療だけでなく、家での食事が大切だ」と話す。食事療法と聞くとおいしくないというイメージや、食品に制限があるのではという印象を持たれることが多い。だが実際には食べてはいけない食品があるわけではなく、1日の摂取カロリーを守れば肉や魚、炭水化物などを食べても良いという。

矢作准教授は「患者やその家族はもちろんだが、多くの人にヘルシーな食生活を送ってほしい。糖尿病患者のための食事がおいしいと知ってもらいたい」と語った。

トランジスタの性能向上

雑音の測定範囲広がる

トランジスタは小型化が進めば進むほど電流を流しにくくなるとする能力が奪われ、結果的に機器の不具合につながる。このような状況を改善するため、大毛利健治准教授（数物系）らの研究グループは6月12日、東京工業大学、ディー・クルー・テクノロジーズ株式会社と共同でこの問題をチェックできる計測機器を改良し、その測定性能を向上させたことを発表した。

トランジスタは携帯電話やコンピュータなどの電子機器に欠かせない部品。電流が川の流れだとすれば水門のような役割を担っており、いくつものトランジスタを組み合わせることで、情報の伝達や計算が行われている。これまで絶えず小型化が進められてきたが、それに伴って顕在化するのが「雑音」だ。

雑音は電流量の変動のことで、トランジスタの電流を流したり止めたりする能力が弱まることなどで発生する。電流量が少なくなれば次のトランジスタに十分な電力が供給されず、機器の不具合にもつながる。

そのため、「雑音」の測定は電子機器の性能を判断する重要な作業だった。この雑音は周波数【　】が1ヘルツ以上の高周波の場合と、100ヘルツまでの低周波の場合とで測定方法が異なる。この中間の範囲で発生する雑音も存在するが、これまでその測定手段はなかった。

そこで同研究グループは昨年、独自の装置を開発。低周波帯で発生する雑音を測る既存の方法を改良し、測定可能な低周波の範囲の上限を上げた。その結果測定可能な範囲の上限は100ヘルツから150ヘルツまで広がった。更に今年6月、集積回路を使い同計測装置を高性能化。800メガヘルツまで測定が可能となり、これまで市販の測定器では測定不可能だった範囲の8割をカバーできるようになった。

今後は、この計測機器を企業に利用してもらうことも視野に入れている。大毛利准教授は「より良い製品を世に送り出すことに貢献していきたい」と話した。

◆**周波数**＝1秒間あたりの電波などの振動回数で、単位はヘルツ。回数が少ないものを低周波、多いものを高周波と呼ぶ。1メガヘルツ＝1000キロヘルツ。

集積回路を使い改良した計測装置。先端の針で雑音を感知する

本学と茨城県の研究グループ

新たながん治療装置完成へ

人体の負担を軽減

本学と高エネルギー加速器研究機構、茨城県などの共同研究グループが開発を進める中性子線【　】を使った新しいがん治療装置の完成が近づいている。装置の要である加速器【　】は今年度中にも完成する予定だ。装置が完成すれば体へのダメージが少なく、短時間で治療が済む最新のがん治療が茨城県でも実現する。

同研究グループは中性子線でがん細胞を破壊する「ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）」を実用化するため、2010年から加速器を使った治療装置の開発に着手した。加速させた陽子【　】をベリリウムに当てて中性子線を発生させる仕組み。開発中の装置は現在、茨城県東海村の「いばらき中性子医療研究センター」内に設置されている。

2015年には装置を使った治療が始まる予定で、本学は18年をめどに本学附属病院への装置導入を目指す。

BNCTは、がん細胞に集まる性質を持ったホウ素を患者に投与し、ホウ素が集まった場所に中性子線を当ててがん細胞を破壊する治療法。がんの治療法としては、周囲の健康な細胞に与えるダメージが比較的少ないメリットがある。一度に大量の中性子線を当てることができるため、治療はたった1日で済む。また再発がんや体内の深いところにできたがんの治療にも対応できる。

◆**中性子線**＝放射線の一種で、中性子が同一方向に連なって進む状態を指す。◆**加速器**＝磁力で陽子や電子などを引き寄せ、そのスピードを上げる機器。◆**陽子**＝物質を構成する最小単位・素粒子の一つで、原子核を形成する。

従来の装置では原子炉を使うため点検の間は治療ができず、また原子力規制法の規制対象であるなど運用しづらい側面があった。だが、開発中の加速器を使った装置の場合は原子炉が不必要で病院内での運用も可能だ。

同研究グループの熊田博明准教授（医学医療系）は「日本はBNCTの分野でトップレベルの研究を行っている。実用化を進めて、日本の医療産業の再建とヌディカル・ツーリズム（医療サービスを売りに旅客を呼び込む取り組み）の振興にも役立てたい」と話した。

第1回起業家教育講座

つくば市内の起業を支援

社会や地域に新たな活力

本学とつくば市、インテル株式会社が共同で行う第1回起業家教育講座が、5月25日に1D棟201で開かれ、上原健一教授（産学リエゾン共同研究センター）と、インテル株式会社副社長の阿部剛士さんが講演を行い、会場には約100人の学生や社会人が訪れた。

この講座は「起業」を、その社会や地域に新たな活力をもたらすものとらえ、つくば市内でベンチャー企業を立ち上げたり、会社で新しい挑戦をすることを支援している。外部から招いた講師による全7回の講演とワークショップで、起業に必要な知識や能力の養成を目指す。

講座ではまず上原教授が自身の体験を踏まえながら、起業して自分の働く場所を作ることについて講演した。働く場所を大企業の中だけに限定すれば、不満があってもその企業のルールに自分を合わせなければならない。企業の外でも活躍できる場はあり、自分でその場所を作れるという考えを持っては、前向きに、自分のために働くことができると語った。

続いて阿部さんは、グローバル化した社会でのリーダーシップについて講演した。国境を越えて、地球単位で人・物・資本が移動する場でリーダーシップを発揮するために重要なのは、「その人は」人間として信頼できるか？」ということだけだという。一人の人間として自分をさらけ出すことで、相手を共感させて変化へと導くリーダーが、未来を切り開くのだと語った。

来場した学生は「企業に就職することばかり考えていたが、起業するという道もあるのだと感じた」と語った。

バイオeカフェ

古田講師が美肌のすすめ講演

皮膚の正しい知識伝える

生物学類と生命環境科学研究科が主催するバイオeカフェが、6月11日に総合交流会館多目的ホールで開催された。72回目となる今回は「美肌のすすめ～皮膚のバイオロジー」というテーマで古田淳一講師（医学医療系）が講演。会場には女子学生をはじめとして、多数の人が来場し、話に聞き入った。

美肌について語る古田講師

古田講師は、美しい肌の保ち方に関して皮膚科医としての経験を交えつつ、写真や動画を用いて分かりやすく説明。にきびのケアや化粧品の使い方などについて語った。

参加者同士が話し合うテーブルトークでは「どうして（肌を）焼く？どうして（日焼けを）気にする？」「知っている化粧品の名前をあげてみて」という身近なテーマでディスカッションを行った。「日焼けは気になるが、日焼けを防ぐことで何かの病気になると聞いた」という学生の不安の声に対し、古田講師は「日焼け止めを塗るなどの普通の対策なら、日照不足で病気になる心配は無い」と説明した。

また質疑応答の時間では「最近かたくむりパックやきゅうりパックなどの美容法を聞くが効果はあるのか」という質問に対し、「パックの意義は保湿剤を密着させることで、医薬品と同レベルの効果は無い。またパックの中の成分が原因で肌に異常が現れることもあるため、よく分からないものは肌に付けないことが大事」と注意を喚起した。

来場した上田千恵子さん（生物1年）は「今回の話で化粧品の成分表示の正しい見方を知ることができた。特に日焼け止めの正しい利用の仕方を学ぶことができて良かった」と話した。

G20フォーラム報告会

異文化交流語る

4月18～20日にかけて行われた「G20ユースフォーラム2013」の報告会が6月5日、3A棟305で行われた。G20ユースフォーラムは世界20カ国から約150人の学生や研究者らが集結する国際イベントで、今年はロシアのサンクトペテルブルグで開催された。本学からは学群生、大学院生合わせて5人と職員1人が参加した。

ユースフォーラムでは、それぞれの研究内容を発表し合う「カンファレンス」と、特定のテーマについて議論する「サミット」が同時開催。報告会では参加した学生が成果を発表した。

前半はカンファレンスに参加した二人が登壇。現地で大勢の外国人を前に、民族多様性と経済成長の関係についてプレゼンテーションした原朋弘さん（国総4年）は「自分の専門分野を知らない人たちにどうやって内容を伝えるか苦労した」と異文化交流の難しさを語った。

後半はサミットに参加した二人の学生が経験談を紹介。ある議題に対してさまざまな国の人と話し合い結論を導くサミットでは交渉能力が求められたといい、参加した藤田綾さん（同4年）は「良き日本人こそ、良き国際人。外交では自国のことをよく知っていることが重要だと分かった」と感想を語った。

来場した学生は「世界で活躍するためには、社交性や交渉力も必要だと感じた」と話した。

第17回手塚治虫文化賞

山本美希さんが新生賞受賞

漫画界に新しい風送り込む

本学生で漫画家の山本美希さん（芸術1年）の漫画『Sunny Sunny Ann!』が、第17回手塚治虫文化賞の新生賞を受賞した。手塚治虫文化賞は故手塚治虫さんの業績をたたえて創設された賞。同作品が受賞した新生賞は漫画界に新しい風を送り込んだと評価された作品に贈られるもので、過去には『ヒカルの碁』『鋼の錬金術師』などの人気作品が受賞している。

受賞した『Sunny Sunny Ann!』は家を持たず車で移動しながら生活する、アメリカ人女性アンが主人公の作品。周囲の人々の常識から少し外れているものの、自分らしさを貫くアンの型破りな生き方が印象的だ。アクセントの効いた迫力のある描線など、独特な画風がキャラクターの力強さを一層深めている。

アンのイメージは、たまたま見た洋画に登場したパワフルな女性にヒントを得たもので、そこからごわついた髪に太い眉といった外見の個性的なキャラクターができた。それまでは日本人が登場する漫画を描いていたが、アンの姿が日本人らしくなかったため、アメリカを舞台に選んだ。キャラクターのせりふにも「どちらのレディーかしら？」「世界中みんながアビー登場人物の少女）のママなのよ」などアメリカ風のユーモアと、アンの力強さが感じられる。

子どもアートラウンジ

自身の芸術の見方育む

小学生20人が参加

子供たちが芸術作品を観賞し、作品の見方について自由に話し合う「筑波大学子どもアートラウンジ」が6月1日に本学芸術系ギャラリーで開かれ、小学校3年生から5年生までの子供たち計20人が集まった。

この企画は、子供たちが作品の「正しい見方」を教わるのではなく、自分で作品の意味を探究する力や感じたことを伝える力を育てる目的で開催された。

子供たちは大学院生の案内で絵画や彫刻などの芸術作品を1時間ほど鑑賞した。鑑賞中はそれぞれが発見した作品の見方や感じたこと、その根拠を発表し合い、自分と異なる意見に驚いたり同意したりしながら鑑賞後には、気に入った作品を基に物語を作るという課題が出され、子供たちは（自分に見えたまま）作品と1対1で（向き合い）、考えている。子供と一緒に作品の意味を探っていくことは、大事なことだ」と語った。

山本さんは「漫画を描くことを仕事にするのは大変だが、満足のいくシーンが描けて、良い作品ができると楽しい。これから数年間は大学院で勉強をするつもりだが、この作品とは全く違うものを描きたい」と創作活動への意欲を語った。

彫刻作品を鑑賞する子供たち

100万人のキャンドルナイト

幻想的な光楽しむ

省エネ・節電のきっかけに

キャンドルをともして節電について考えるイベント「100万人のキャンドルナイト」が7月5日の19時から20時30分まで、松美池前で開催された。会場には約100人が集まり、幻想的な光を楽しんだ。

今回は全国で行われている「100万人のキャンドルナイト」に本学が参加した。このイベントは毎年夏至と冬至の日に行われ、個人や企業が室内の電気を消してキャンドルの光だけで過ごすというもの。「でんきを消して、スローなる夜を」をスローガンに、キャンドルの自然な光を通して省エネや節電について考えるきっかけを作るのが目的だ。

本学での開催はつくばフェアトレード推進委員会FRATが企画した。当初は夏至の6月21日に行われる予定だったが、雨天のため順延された。会場ではアカペラサークルDoo－Wopやギター・マンドリン部などの演奏が行われ、来場者は美しい歌声や音色を楽しんだ。ステージでアカペラを披露した青木孝也さん（地球3年）は「キャンドルの光は幻想的で、歌っていて気持ちが良かった」と話した。

FRAT代表の佐藤文香さん（生資4年）は「雨が降った時は中止になるかと思ったが、無事に開催できて良かった」と話した。

（12面に関連写真）

投稿募集

本紙では皆さまからのご意見・反射鏡などの投稿を募集しています。

TEL 029・853・6699
e-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp

筑波時評

濱田洋実

新型出生前診断は医学の進歩か

昨年秋から「新型出生前診断」という言葉がマスコミをにぎわせている。最近では、今年の4月から一部の病院でスタートした、などと報道されている。では、何が「新型」なのか？そもそも「出生前診断」とは何なのだろうか？

「出生前診断」とは、読んで字のごとく「出生前に診断すること」、つまり「お母さんのお腹の中にいる生まれる前（出生前）の赤ちゃん（胎児）に、何か病気がないか医学的な検査を行って、判断（診断）すること」である。広い意味では画像診断と呼ばれる超音波検査やMRI検査による診断なども含むが、狭い意味では胎児の遺伝学的な異常（染色体異常や遺伝子異常）の有無を生まれる前、しかも妊娠の早い時期に診断することを指している。今回の「新型出生前診断」は、この狭い意味での出生前診断に含まれる。

こうした狭義の出生前診断は、従来、お母さんのお腹の上から長い針を刺して、胎児の周りにある液体（羊水穿刺）や胎盤を形成する絨毛という組織（絨毛採取）を採取して行われてきた。ただしこれらの方法は、針を刺すため流産の危険性があることが大きな問題であった。これに対して今回話題となった診断法は、お母さんから採血するだけで胎児の染色体異常の診断ができるというもので、流産の危険性が全くないことが画期的、まさに「新型」なのである。

では、我々はこの新しい診断法の登場を、ただ医学の進歩としてとらえればいいのだろうか？それ

ここに何か問題はないのだろうか？

羊水穿刺や絨毛採取と異なり確定的に診断できるわけではないという医学的な問題と共に、最も重要なのは倫理的な問題であろう。そもそも、「新型」でなくとも狭義の出生前診断は大きな倫理的問題を抱えている。生まれた後の子供や大人において、ほとんどすべての病気の診断は、正しい治療を行うために行われる。これに対して、胎児の遺伝学的な異常には根本的な治療法がないため、我が国では診断されれば人工妊娠中絶を行うという前提で出生前診断を受けるカップルがほとんどである。そうした人工妊娠中絶は倫理的に許されるのか。そうした目的の診断は倫理的に許されるのか。

更に今回の「新型出生前診断」においては、流産の危険性がないことが更に問題を大きくしている。遺伝カウンセリングと呼ばれる、医療側から患者さんへの適切な情報提供・十分な相談が行われた後に実施されている従来の出生前診断とは異なり、適切な遺伝カウンセリングも実施されないままに、採血だけという手軽さから安易に実施される可能性があると指摘されている。

生まれつきの染色体や遺伝子などの変化に基づく病気や遺伝型は、単なる病気ではなく人としての多様性としてとらえるべきである。この考えの基に、我々はこの新しい検査の今後を注意深く見守っていく必要があるだろう。（医学医療系・准教授）

本の一冊

伊藤益

過去の意味を変えて
時代区分の成立根拠
大島康正著

まだ学部の学生のころ、竹園の父の官舎の書斎で異様な光景に出会った。萬葉集を専攻する父の書棚は大半が文学・史学関係の書籍で埋められていたが、片隅に哲学関係の書が並んでいた。その中に『時代区分の成立根拠』と題する小著があった。題名からして史学の本にしか見えない。なぜ哲学書の中に並べられているのか、理解できなかった。父の書籍の並べ方が恣意的なものなのかと思いながら、何気なく手にとって開いてみた。目次を見て、ようやくそれが歴史哲学の書であることが分かった。著者は大島康正。馴染みのない名前だった。そのまま書棚に戻そうと思った。ただが、何かが気になった。目次の「第五章　時代区分の主体的根拠」などの章名が、自分がひそかに求めていたものを暗示しているように思えたのだ。序から順に読み始めたが、そして驚愕した。歴史の時代区分ということに関する通念が一瞬のうちに覆されたのだ。

それまで私は、時代区分とは歴史家が歴史内在的に行うものだと信じていた。ところが大島康正によれば、それは事実の誤認だという。大島は、時代区分とは、己れの生きる時代を新たな時代として画そうとする実存的主体が、超歴史的な観点から主体的に踏み行うものであり、その遂行者は歴史家ではなく、各時代の知の巨人たちだと説くのである。言われてみればその通りだった。歴史上の最初の時代区分は詩人ヘシオドスによってなされたし、古代・中世・近代という今もなお一般的な時代三分法はいわゆるルネッサンス・メンシュに由来するものだ。しかも、大島は、そうした時代区分が、未来の無を現在に呼び込み、現に在る自己を否定しつつ過去の意味を変容させていくと主張する。自己を未来に向けて高めようという実存的な魂が、到来の方向をめがけて過去を変える というのである。そう考えるならば、罪過に満ちた日本人の過去（戦争）も未来志向的に変質させることができる。その時私は、日本人が矜持を取り戻しうる可能性を信じた。

その夜父から、大島康正が筑波大の倫理学の教授であることを教えられた。当時進路に悩んでいた私は、その瞬間筑波大の大学院に進学し、大島のもとで歴史ないしは時間の哲学を学ぶことを決めた。己れ自身の恥多き人生（青春）を意味づけ直すことができると信じながら。なお『時代区分の成立根拠』は、ながらく絶版状態となっていたが、今は、燈影舎版京都哲学撰書の一冊として読むことができる。（人社系・教授）

反射鏡

今月のテーマ「学生版・私の一冊」

成長し変わる家族のつながり

塚本真理（芸専1年）

「おまえ、生まれてこなければよかったな」

この『ハッピーバースデー』という本はこんな衝撃的な言葉から始まった。主人公のあすかは母や兄から「おまえ、生まれてこなければよかったな」と言われ、ショックで精神を病み、声を無くしてしまう。あすかの母は子供のころ病弱な姉がいたため両親が面倒を見てくれなかったことでコンプレックスを抱いており、それが原因であすかを精神的に虐待していた。あすかは祖父母の家に移り精神を回復し、母を母ではなく一人の人として見ることで母との関係を解決し家族のつながりを取り戻した。

この本を初めて読んだのは小学4年の時だが最近ふと気になって読み返してみた。あすかがそれぞれ問題を抱えた家族を少しずつ解きほぐしていく様子がとても印象的だった。家族との微妙なやり取りやいじめへの対応の中にハッと気づくものを見つけられる本だと思う。電話、桃、誕生の木などキーワードになるものが物語全体でつながっているところも面白味の一つだ。この本では虐待、いじめなどに関する問題の中で登場人物全員の成長が見どころである。辛らつな言葉から始まり登場人物への共感を必ずどこかで得られる部分がある、問題解決に向かって明るく開けていくような、読み終わった後にはすっきりとする作品だった。

家族のつながりについてずっと心に残っていることがある。私は幼いころおじいちゃん子で祖父母の家によく遊びに行っていたが、祖父はある時から私の名を「さん」付けで呼ぶようになった。それまでは呼び捨てであったり「ちゃん」付けで呼ばれていたのにどうしてなのか。孫として見てもらえなくなってしまったような気がしてとても悲しかった。祖父には幼いころからずっと可愛がってもらっていただけになぜなのかという疑問が大きく残ったし、それまでとは違った距離を感じた。その後、祖父は亡くなってしまった。なぜ祖父は「さん」付けで呼ぶようになったのか。私は祖父が私を孫として扱わなくなったのではなく私の自立を感じてそう呼ぶようにしたのだと思うようになった。そう思うようになってからはずっと感じていた祖父との距離や悲しさが薄らいだと思う。

大学生になって、実家を離れ一人で暮らすようになった。離れて暮らすからこそ家族のつながりを大切にしていきたい。（青木和雄・金の星社）

自分の心に正直に

森脇慎（社会1年）

私は小説を読むことは好きだが、自己啓発書や評論などは、何が面白いのか理解ができなかった。

しかし、一冊の本と出会い、見方が変わった。その本が『こころの処方箋』である。著者の河合隼雄は日本で最も有名な心理学者の一人である。

そんな偉大な心理学者が書く本の第一題目が「人の心などわからはずがない」である。自分の考えていた心理学者像は一瞬で崩れ去り、私がこの本に興味を持つにはそれで十分だった。

そして、読み進めていく中で、最も心に残ったのが、「やりたいことはまずやってみる」という題目だ。やりたいことがあって他のことが手につかないならば、まずやりたいことをやるべきということが書いてある。自分にとって、やりたいこと。それは、旅だった。

それまでは、あこがれを抱くのみで、勉強があるからと自分に言い訳をして動くことをしなかった。実際は勉強をしていないにもかかわらずだ。しかし、この本を読んで積極的に動くようになった。もちろん、高校生の身では、行くことのできる場所など限られている。それでも近場で魅力ある場所はたくさんある。自転車を走らせ多くの場所を訪れた。渋谷でハチ公に会い、スカイツリーを外から眺め、多摩川をきかんぼって奥多摩湖まで行き、鶴巻温泉に浸かった。その時には大学生と間違えられ、調子に乗ってその振りをした。少し大人になった気がした。そこで思い出した。河合隼雄は、好きなことをした後は他のこともやらなくてはと感じると言っていた。私にとっての他のことは、もちろん勉学であり、本当に大学生になるための受験勉強だ。

その後の私は受験勉強に集中することができた。そして無事この筑波大学に合格した。この本と出会うまでの成績を見てみると、いまだに合格したことを不思議に思うほどだ。だからこそ『心の処方箋』は、私の一冊にふさわしい。も読んでいなかったとしたら、この文章も書いていないだろう。

昨年は旅に出ていない。その反動なのだろうか、今年はできるだけ遠くに行きたい。そして帰ってきた時には勉強しよう。落ちこぼした単位を拾いに行くために。（河合隼雄・新潮社）

現代に通じる源氏の恋愛観

添島香苗（生物1年）

源氏物語が好きだと言うと、大抵「へー凄いね……」と一枚壁を隔てたような応をされる。確かに、その有り余る程の歴史的価値のせいか敷居が高い印象があるのは事実である。しかし、私はそういう学問的な面を一切抜きにして、それこそ人が現代の恋愛小説を好むような感覚で源氏物語が好きなのだ。

初めて源氏物語を手に取ったのは高校2年の冬、勉強になるからと古典の先生に田辺聖子訳を勧められたのがきっかけだった。古典は好きだったし、読んでおいて損はないだろうと気楽な気持ちで読み始めたが、一気に夢中になってしまった。一時は脳内の独り言まで古文調になったくらいだ。

この物語の魅力と言えば、やはり光源氏という人物であろう。彼は人妻だろうと義理の母親だろうと容赦なく手を出し仕舞いには幼女を誘拐して好みの女性に育て始めるような、とにかくどうしようもないやつである。しかしそれでいて一度関わった女性は生涯忘れずに世話し続けるような優しさがあり、彼にひかれる女性の気持ちも悔しいことによく分かってしまう。

登場人物の抱く感情は、物語が書かれてから千年たった今でも色あせることがない。夕顔をはかなくも死なせてしまった源氏の嘆き。父親代わりだった源氏が男の顔を見せた日の、紫の君が受けた失望も似た衝撃。末摘花の醜い鼻を直視してしまった源氏の落胆――。いや、そんな平易な言葉では形容し難いような感情、ちまたにあふれ返る恋愛小説では味わえない、しみじみとした素朴な感情がページをめくる私の胸に沸き上がってくる。そして、これこそが源氏物語を貫く主題と言われる「もののあはれ」なのかも知れないと思い至った時は心が震えた。

和歌で気持ちを伝え合ったり、互いの顔も知らずに結婚したり、彼らは我々とは全く異なる世界を生きている。それなのに、彼らが感じた「もののあはれ」を私たちは共有できるのだ。時代は変わっても、日本人の心の奥底を流れるものは何も変わらないのかも知れない。

そうやって想像上の過去に想いをはせ、日常の煩わしさから離れて壮大な旅に出る。これだから、源氏物語はやめられないのだ。（田辺聖子訳・新潮社）

次号のテーマは **自慢の一品** です

連絡先　TEL　029・853・6699
e-mail　shinbun@un.tsukuba.ac.jp

記者の声

加藤茂行

「内向き志向」からの脱却を

大学3年の時、ベトナムで1年間、ボランティア体験をした。そこで見たのは、日本と全く異なる価値観が広がる世界だった。今、留学希望者が激減するなど、日本の若者の「内向き志向」が強まっている。だが、身近には、グローバル化が迫る。人や物が簡単に国境を越える中では、世界の多様な価値観に直面せざるを得ない。それを理解する最良の方策は、やはり海外に一度は出て、生活することだと思う。

ベトナムでの経験は、私を大きく変えた。首都ハノイ。中心部を流れるホン河流域では、地方から上京し職を得られなかった人たちが、川の上に質素な家を浮かべ暮らしていた。この地区には、貧しくて学校に行けない子供が多い。そして私のそこでの仕事は、その子供たちを無償で教育する施設で給食係として働くことだった。

活動を通じて驚いたのは、子供同士の絆の強さだった。施設にいたのは幼児から10才半ばまで。そこでは、年長者が年下の面倒をよく見ていた。一緒に遊ぶのはもとより、親せきと食事、育児、洗濯、家の雑事など、あらゆることを分担し、助け合い、厳しい生活を乗り越えようとしていた。

子供同士、そして親せき同士の強い絆。日本が失いつつあるものが機能していることに、私は大きな衝撃を受けた。現地体験を通じ、私の家族や友人、そして社会の在り方に対する考え方は大きく変化した。

ハノイのホン河流域の様子

今、日本の若者には内向き志向が強まっている。文部科学省が昨年度までに「日本人の海外留学状況」によると、日本の海外留学者数は2004年のピーク時の約8・2万人から、10年には約5・8万人まで落ち込んだ。また、産業能率大学の調査によると、新入社員の半数近くが「海外で働きたくない」と回答している。

この一方で、日本企業の海外進出が加速しているのも事実だ。経済産業省によると、日本企業の海外現地法人数は01年の約1・2万社から10年に約1・9万社に増加した。

海外進出を進める日本企業と、海外を望まない若者たち。このままでは日本は確実に世界の流れから取り残される。

この状況の中で一つだけ、言いたい。先に、ベトナムの経験は、私を大きく変えたと書いたが、こういった異文化社会での体験を元に、人生観や価値観が変わったのは何も私だけに限ったものではないのだ。

日本学生支援機構「海外留学経験者の追跡調査」（12年）によると、留学を通じ、多くの人が広い視野、異文化・国際感覚、価値観・考え方などを獲得したと回答した。留学では語学習得が目標とされがちだが、現地の人々の考え方に触れ、新しい価値観を得るという側面も強い。

現在、就職活動の多忙さなどから、多くの学生が留学を断念している。だが、それだけで「海外」を忘れてしまうのはあまりにも惜しい。繰り返すが、日本では考えられないほど、世界の価値観は多様性に富む。その理解のためにも、若いうちに海外生活を経験するのは意義があると思う。（元筑波大学新聞編集部員・地球学類4年）

第39回宿舎祭

晴天に恵まれた2日間

第39回宿舎祭（やどかり祭）が5月24－25日に平砂学生宿舎周辺で行われた。今年は前夜祭、本祭共に晴天に恵まれ、全てのイベントが予定通り実施された。大盛況の2日間を本紙記者が取材した。（鈴木拓也、油布知夏＝文学類、望月麗＝比較文化学類、冨田慎二＝日本語・日本文化学類、井口彩、林健太郎、原啓一郎、平嶋健人、森脇慎＝社会学類、姉崎信＝心理学類、添島香苗＝生物学類、パク・ジョンヒョク＝物理学類・12面に関連写真）

前夜祭

24日、16時から前夜祭が始まった。

メインステージで行われた野外ライブにはアカペラサークルDo－Wopなどの音楽系サークルが多数参加。軽やかな演奏に、会場は盛り上がりを見せた。

華やかに始まった前夜祭のフィナーレを飾ったのは火文字。火がともされ、今年の漢字「踊」が現れると観客からは歓声が上がり、会場は熱気に包まれた。

漢祭り

面白い漢を決める

16時50分から本学で最も面白い男性を決めるイベント「漢祭り」が、メインステージで行われた。これは3人1組の学生が行ったものまねや漫才などのパフォーマンスを観客や審査員が評価し、各チームがポイントの合計を競うイベントで、5組15人の男性が出場した。

特に高い評価を受けたのは「第四学群」と「たけのこよりキノコ派」の両チーム。第四学群は機動隊にふんした姿で登場し、軍隊をネタにした漫才を披露した。一方たけのこよりキノコ派は、アメリカの人気歌手ビヨンセのものまねを披露。表情や細かな動きまで再現したものまねに、会場は笑いの渦に包まれた。

優勝したたけのこよりキノコ派チームには、お菓子の詰め合わせとゆかたコンテストの優勝者と写真を撮る権利が与えられた。チームのメンバーは「優勝できて感無量。1カ月前から準備をした甲斐があった」と語った。

副賞を手に喜ぶたけのこよりキノコ派チーム

やどカラ祭

歌声で会場を魅了

25日、12時40分からはメインステージで本学生がカラオケで歌のうまさを競う「やどカラ祭」が行われた。予選を勝ち抜いた6人が出場し、J－POPをはじめ、洋楽から演歌までバラエティ豊かな曲目を披露。会場は手拍子や合いの手で大いに盛り上がった。

審査員からは「減点のしようがなく、甲乙つけ難い」との声が漏れたが、接戦を制し見事優勝したのは窒井慧さん（医学3年）。甘い歌声で福山雅治の「Message」を歌い上げ、聴衆を魅了した。窒井さんは「審査員を見ると緊張して足が震えたが、それを吹き飛ばす思いで歌った。優勝できて最高の気分だ」と笑顔で語った。

窒井さんの応援に来たという宮崎慎一さん（医学3年）は、「出演者のパフォーマンスはどれも面白かった。応援のつもりで来たが、イベント全体を楽しめた」と話した。

福山雅治の「Message」を熱唱する窒井さん

フィーリングカップル

運命の人を発見

13時からパフォーマンス広場で新企画「フィーリングカップル」が行われた。これは、初対面の男女がさまざまなゲームを通してカップル成立を目指す企画で、男女それぞれ5人が参加した。

始めに、司会者が参加した理由について質問。「なんとなく」「興味本位で」といった答えが出る中で、ある女性が「イケメンの彼氏が欲しいから」と答えると観客から笑いが起こった。また「初デートに行くとしたら？」や「異性のどんなところが好き？」といった質問に対しては「やどかり祭」「ふと見せる笑顔」など参加者が思い思いに回答した。

その後行われたジェスチャーゲームでは「スカイツリー」や「御輿」などのお題が出され、軽妙なジェスチャーをする男性たちが会場を沸かせた。

質問やゲームを通して、男女の仲が深まったところで、男性が意中の女性に告白。二人の告白が成功した。告白に成功した高島瑛彦さん（情報創成4年）は「告白がうまくいって感無量だ」と笑顔で話した。企画責任者の佐藤朋美さん（知識図書3年）は「人が集まるか不安だったが出演者が無事に集まり、楽しんでくれて良かった」と語った。

告白する高島さん（右）

御輿

個性的な演出に大歓声

15時にはパフォーマンス広場で御輿パフォーマンスが行われた。今年は学群・学類や委員会から10団体が参加し、各団体が劇の舞台やアニメのキャラクターなどをかたどったさまざまな御輿を制作した。

御輿を担いだパフォーマーたちは平砂共用棟前を出発し、威勢の良い掛け声と共にパフォーマンス会場まで練り歩いた。会場に到着すると、ダンスや御輿のデザインに合わせた劇を披露。個性的なパフォーマンスに観客からは笑い声が絶えなかった。

全団体のパフォーマンス終了後、宿舎祭のWebサイトを用いた投票が行われた。1位は、竜宮城を模した御輿を背景に浦島太郎の寸劇を行った生物学類。劇中にはたこやいか、更には古代生物も登場し、生物学類らしさをうまく表現した。代表の山川宇宙さん（生物1年）は「優勝できて良かった」と喜びを語った。大人数でも息の合ったダンスでアピールした医学群は2位、不死鳥をイメージした御輿が好評を博した芸術専門学群は3位だった。

会場を訪れた菊地美里さん（人文3年）は「昨年もパフォーマンスを見たが、今年も質が高くて面白かった」と話した。

優勝した生物学類の御輿

ゆかたコンテスト

浴衣美人が祭りを彩る

19時過ぎ、メインステージでは花火を合図に、宿舎祭最後のイベント・ゆかたコンテストが幕を開けた。今年は9学群が出場し、各学群から選ばれた浴衣の似合う女性とその魅力を際立たせるパフォーマーが演技を披露した。

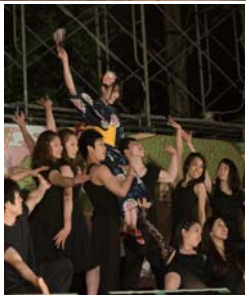
今年度のグランプリに輝いたのは芸術専門学群代表の遠藤皆美さん（芸専1年）。準グランプリには体育専門学群の大河内春奈さん（体専1年）、個性派賞に生命環境学群の福田瑠利子さん（生物1年）が選ばれた。

優勝した芸術専門学群は、浴衣などの衣装や背景を全て手作りで用意。早着替えや背景の目まぐるしい変化、迫力のある踊りで会場を沸かせた。なまめかしい雰囲気で女王役を演じきった遠藤さんは「皆が助けてくれて演じ切ることができた。一緒に踊ってくれた人たちにこの喜びを伝えたい」と語った。

準グランプリの体育専門学群は、パフォーマーが側転や後転跳びなどの大技を次々に繰り出し、運動能力の高さを見せつけた。大河内さんは「舞台が想定より狭く心配だったが、けがなく終えられて良かった」とほっとした表情を見せた。

会場は熱狂の渦に包まれ、宿舎祭は華々しく締めくくられた。

各団体の質の高い演技に、会場は大盛り上がりを見せた。


上＝特製の浴衣を着て舞う遠藤さん、右下＝体育専門学群のパフォーマンス
左下＝個性派賞の福田さん

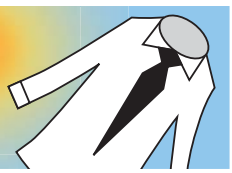
■実行委員長の話

佐野泰成さん（知識図書3年）

今年の宿舎祭実行委員長になることは前々から決まっていたが、最初は実行委員長としてどのように準備を始めて良いの分からなかった。人数の多い実行委員をまとめるのは大変だったが、楽しい宿舎祭にするため笑顔を忘れないように心掛けていた。

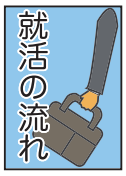
昨年は雨だったため今年もどうなるか心配だったが、良い天気に恵まれて最高の宿舎祭を行うことができた。この日のために全力を注いできた甲斐があり、本当に良かった。

本学から 就職活動を問う



多くの学生にとって、就職活動（以下就活）は人生で最も大きなイベントの一つだ。いつから就活を始めるべきか、学業との両立はできるのか、内定をいかに勝ち取るか……。多くの不安を抱える学生も多いだろう。今回の特集では、現在の就活の流れとその問題点を明らかにし、本学にとっての「理想の就活」を打ち出す。（中島佳奈＝人文学類、井口彩・原啓一郎＝社会学類、倉沢美紀＝国際総合学類、姉崎信＝心理学類）

就活の流れ



現在の就活の流れを説明する。

学群3年次・修士1年次の6月ごろから、インターンシップ（以下インターン）の説明会や選考が開始される。インターンとは学生が企業で一定期間研修生として働き、職業体験を行うもの。インターンの多くは夏休みに実施され、期間は1日や1週間のものもあれば、1カ月を超える長期のものもある。大手企業のインターンは希望者が多く、書類選考や面接なども行われるため、就活の練習としてインターンを利用する学生もいる。

12月1日には企業が採用活動を開始し、「就活解禁」となる。各種就職情報サイトに求人情報が公開され、企業の個別・合同説明会が開催され始める。学生はサイトに大学名や、英検一級などこれまで取得した資格、希望の職種などの個人情報を登録し、興味がある企業の説明会に申し込む。

2月になると志望動機や自己PRなどを書いたエントリーシートの提出や適性検査、筆記試験が行われる。グループディスカッションや面接などで選考を行う企業もあり、就活が本格化していく時期だ。選考会への申し込みや説明会も引き続き行われ、学生は採用試験を受ける企業を選んでいく。

学群4年次・修士2年の4月に、採用選考は最初のピークを迎える。エントリーシートなどでの選考を通過した学生を対象に、一次面接や筆記試験などが行われ、二次、三次と段階を経て、学生が絞り込まれていく。早い人ではゴールデンウィーク明けに内々定が出始める。内々定とは、口頭で翌春からの採用を約束するもので、内々定を獲得した学生は、秋採用へと移行する。

6月になると秋採用、通年採用に関する情報が企業から公開される。エントリーシートの提出や面接などは9月まで続く。これが採用選考の第2のピークだ。

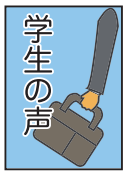
最終的には10月に企業が内定式を行い、学生に内定通知書を渡し、翌春からの採用が書類上で約束され、これが以て就活が終了する。

なお、2016年に卒業予定の学生は、就活解禁が学群4年次・修士2年の3月になる可能性があるため、これらのスケジュールが大きく変わる見通しだ。

学類3年次 修士1年次	6月	インターンの説明会・選考開始	解禁
	夏休み	インターン実施	
	12月	求人情報公開 合同説明会開始	本格化
	2月	エントリーシート提出 適性検査・筆記試験	
学類4年次 修士2年次	4月	内々定の発表	ピーク
	6月	（秋・通年採用の情報発表）	
	10月	内定の発表	終了

内定まで関門多数
16年卒から大きく変わる

学生の声



金銭面の負担も大きい
授業・研究との両立に苦戦

実際に就活を行った学生は、就活にどう苦労したのか。就活を終えた7人の学生に話を聞いた。

まず、就活を意識し始めた時期はインターンの選考が始まる学群3年生・修士1年生の6月からで、本格的に就活を開始したのは年末から1月という意見が圧倒的に多かった。また、多くが筆記試験対策などは年末までには始めていたという。

授業と就活の両立に関しては、多くの学生が3年生までに卒業に必要な単位のほとんどを取るよう計画していた。そのため授業の欠席は少なかったが、「3年間で多数の授業を受けることが大変だった」と話す学生もいる。反対に4年生で受講しなければならない授業があるため、就活を何とか4月の第1週で終わらせようとした学生もいた。また理系の大学院生の場合、就活で研究に十分な時間を取れず、「実験も短時間でできるもので済ませる」という人もいた。このように就活と授業の両立は難しく、就活生は工夫が必要だ。

また7人は、早期に就活が終わっていたため、卒業論文・研究への影響はなかったという。だが就活が長引いた場合、「就活も卒業論文も中途半端になってしまっただろう」と話す学生もいた。

部活動との両立についてある学生は「その日の就活を終えてから練習があるため、体力的にも厳しく、また就活の準備にも時間が取れなかった」と話した。

結局、就活の解禁時期に関しては「今のままが良い」という意見が多い。説明会などが多い時期が冬休みに、面接などで忙しい時期が春休みと重なるためや、内定後に余裕を持って卒業論文・卒業研究に取り組めるためだ。

この他にも7人の話は、就活のさまざまな面での苦労を感じさせた。

就活が本格化してからは「毎日のように都内に出た」という学生が多く、就活が終わるまでにかかった交通費は平均で10万円前後。金銭面の負担も大きいことが分かる。また、エントリーシートを60社分書いたという学生もおり、「書くのが大変だった」「時間がかかった」などの意見が出た。

一方、会社の雰囲気などを知るためのOBOG訪問では、「希望の企業にいるOBOGを見つけるのに苦労した」という学生がいた。OBOG訪問では「OBOGとの話が自己PRなどに生かせ、視野を広げられて良かった」という意見もある一方で、「企業のホームページに書いてあることしか（OBOGに）聞けず、意味がなかった」という意見もあった。

ある学生は「就活は自分の人生を振り返る良い機会になるので、時間を惜しまずとことん取り組んでほしい」とこれから就活を行う学生にアドバイスする。

専門家の声

学業と精神面で負担大きい

本学から見た現在の就活の問題点などについて、就職課の久保田優課長とキャリア支援室の山岸由紀副室長に話を聞いた。

就活の問題点

第1に、学生が学業に集中できないという問題がある。平日に企業説明会や採用試験がある場合、授業を欠席しなければならず、学業との両立が難しくなる。また、就活が長引けば、卒業論文や卒業研究に支障が出る。「就活に膨大な時間を割くことを余儀無くされ、（学生の本分である）学業に集中できないのは、教育機関である大学として見過ごせない問題」と山岸副室長は指摘する。

第2に、就活が学生に大きな精神的負担をかけるという問題がある。不採用が続いて自分に自信を持てなくなったり、周囲が内定を取る一方で自分だけが決まらず焦ったりするなどのストレスは、最大で約1年半続く。学生がストレスを抱え込み過ぎないように進路のサポートだけではなく、精神面でのケアも必要となる。その一方、早々に就活が終わると、学生の気が緩むという問題もある。授業に出席しなくなり、卒業論文や卒業研究に身が入らない学生もいる。「一生涯を通して得がたい、卒業までの貴重な時間をいかに使うか、真剣に考えてほしい」と山岸副室長は呼びかける。

就活の問題点について語る久保田課長

2016年に卒業予定の学生から、就活の解禁時期が現在より3カ月遅くなる可能性がある。現時点で懸念される問題として、①就活の時期と教育実習や公務員試験が重なるため、教員免許を取りづらくなったり、公務員との併願が難しくなる②卒業論文や卒業研究の時期とは重なったままで、学業に集中できない環境は改善されない③就活を解禁する時期を変えない企業もあるため、学生は現在より長い期間就活をしなければならない……などが挙げられている。「解禁時期の遅れで）どのような問題が起こるか分からない。就職課でも支援のシステムを再検討する」と久保田課長は話す。

理想の就活

学業との両立などさまざまな問題がある現在の就職活動。どのように改善すればより学生・大学の負担が減るのか。就職課の久保田課長とキャリア支援室の山岸副室長は、「本来、学生のうちに就活することは良くない」と語る。学業に支障が出るためだ。

産業界は現在大学卒業後2～3年までは就活生を新卒として扱うため、大学3年生で就活を行う人と比べ、卒業後に就活を行ったとしても不利にはならないはずだ。

また、海外では卒業後に就活を始めることが一般的だという。だが現状の日本では、卒業後に学問が専門的になる時期に就活が始まることなどの問題がある。だが、12月解禁の場合、早期に定を取り、安心して卒業論文・研究ができたり、卒業までの時間に学業に打ち込む、留学するなど有効活用できる可能性があるという。「学生が内定後の時間を生かしてくれるならば、就活は早い方が学問を深める時間が取れる」と久保田課長は語る。

「内定後の時間生かして」

「理想の就活」は、産業界の採用構造が変わらないのであれば現在と同じ、「12月解禁が良い」と久保田課長と山岸副室長は語る。もちろん就活が授業と重なってしまうと、研究・学業に支障が出るなど、「学問と社会の接点を知る」、3年生で「就活のために」、なお、「学年に合わせたインターンのプログラム」を作ることで学生が視野を広げ、成長することができる。企業側にも即戦力になる学生を採用できるというメリットがある。

また企業でのインターンについては「学生の教育のために、（企業は）学年ごとに内容が異なるインターンを行ってほしい」と山岸副室長は話す。例えば1年生で「社会という現実を見る」、2年生で「学問と社会の接点を知る」、3年生で「就活のために」、なお、「学年に合わせたインターンのプログラム」を作ることで学生が視野を広げ、成長することができる。企業側にも即戦力になる学生を採用できるというメリットがある。

「大学での学びを通じ、学生が成長して、社会に出てほしい」と山岸副室長は語った。

理想の就活を語る山岸副室長

理想の就活を 提言

他大の例

学生の要望の反映も

他大学の学生の就活とその支援の実態について、全国の5大学に話を聞いた。

就活支援の内容については本学と同様、▽相談窓口を設ける▽企業説明会を開く▽OBOGとの連絡ネットワーク作り▽インターンシップの紹介……などを行っている大学がほとんどだった。他大学にはない本学独自の取り組みとしては、書類やエントリーシートの整理ができる他、自己分析に役立つワークシートなどが入ったオリジナルのバインダーの配布がある。

各大学は学生へのアンケートや相談窓口を通して要望を把握しており、結果を支援活動に反映させている。ある大学によれば、最近は自己分析や面接対策の支援をしてほしいという声が多いという。

また、相談窓口で「就活と学業との両立」について相談を受けたことがあると回答したのは2大学。相談内容は「学業に支障が出そうだ」などだ。主に大学院生から研究活動との両立に関する悩みが多く寄せられるという大学もあった。

就活支援の課題について各大学が挙げたのは▽（学生の）学業がおろそかになっている▽個々の学生の状況を把握できない▽なかなか就職先が決まらず、12～1月になって窓口に駆け込む学生がいる……などだった。

一方、ある大学では学生が「テレビCMで見たことがあるから」などと安易に企業を選んでいることを問題視。学生たちに実際に働くということを意識させ、「企業を見る目」を養うため企業の社会貢献活動についての説明会開催を始めたという。

他にも、全ての大学が今後直面する問題として2016年卒業予定の学生から、就活の開始時期が3年生の12月から翌年3月へと変わる可能性がある。学生は「短期決戦」を迫られることになるが、これに対しては学生に志望先を絞らせたり、企業研究イベントの内容を充実させ、その回数を増やしていくという意見があった。

学業と就活の住み分けを

本紙からの提言

ほとんどの学生がいずれ直面することになる就活。社会の荒波に向かって船をこぎ出す前に悩む学生は多い。どうすれば学生の「本分」である学業と就活を両立できるのか。

就職情報会社の株式会社マイナビが全国の大学・短大456校にアンケートを行い、その回答をキャリア・就職支援への取り組み調査」にまとめた。それによると、就活解禁が12月から、例えば、翌年の3月になることで、「就職せずに卒業する学生が増える」と回答した大学が46・1％、「就職留年が増える」と回答した大学が31・4％を占める。短期化することで就活の過程で自己分析や業界・職種・企業研究が不十分になり、学生が採用試験を受ける会社数も大幅に減る可能性があるからだ。

また、就活開始が3月になることで卒業論文・卒業研究に取り組む期間が圧迫される。大学4年間・修士2年間の集大成である卒業論文・卒業研究がおろそかになっては学生の本分を達成したとはいえない。

そこで就活解禁の時期は現状の12月始まりが良いだろう。そして就活が終わった学生が落ち着いて学業に取り組めるよう、4年生を対象に、授業開始時期を遅らせ、「就活後」に合わせた授業を開講するのも良いかもしれない。

だが12月就活解禁に関しては、就活を終えた学生から、こんな話も聞く。「企業も大学3年生がまだ専門的な研究をしていないことを知っているため、面接では学生の研究について聞かれない。これでは学生の本分である学業をうまく就活で生かすことができない。

これを避けるために、大学は就活が始まる12月までに、学生が自身の興味のある分野だけでも、ある程度研究の方向づけをできるようにしたらどうか。例えば私が受講している演習では、就活前に学生が研究成果を残せるために論文を書かせることにしている。

この場合、就活と学業をうまく住み分けることで、学生が一つのことに集中でき、より成果が出せることが期待できる。もちろん学生も、学業から就活、就活から学業への切り替わりにうまく対応する必要がある。

学生が学業に専念できる仕組みを作れば、より専門的に学び、その後社会に出ることができる。そうすれば、学生は社会の荒波の中でもしっかりと舵をとることができるだろう。（中島佳奈＝人文学類3年）

12月まで	自身の研究の方針づけ ⟶ 学習内容の再認識
12月	就活解禁
2月	就活の本格化
4月	内々定の発表
6月	（秋・通年採用の情報発表）
10月	内定式
	「就活後」授業の開講 ⟶ 学業に専念・社会に出る準備

先端科学 HELLO!

アラジン1 アレルギーを抑える「魔法」製薬会社と特効薬を開発中

今年の春は特にマスクをしている人が目立った。年々多くなる花粉の飛散量で、花粉症患者が増加したからだ。花粉症だけでなく、ぜんそく、アトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患にかかる人も増加しており、現在世界では3分の1の人が何らかのアレルギー疾患にかかっているという。このアレルギー疾患を根本的に克服する研究を渋谷彰教授（医学医療系）が行っている。

アレルギーはどうして起きるのか。まず、花粉などのアレルギーの原因が体内に入ると、その侵入を知らせる物質が体内で働く。その物質が「肥満細胞」の表面にある一部の受容体【◆】と結合すると肥満細胞が活性化し、ヒスタミンなどの化学物質を含む微小な粒を放出。それが血管や皮膚などに作用することでアレルギーが起こる。

だが渋谷教授の研究で、肥満細胞の表面にはアレルギーを抑える受容体もあることが分かった。特定の物質と結びついて肥満細胞の活性化を抑え、結果的にヒスタミンなどの放出を妨げるもので、渋谷教授はこのような受容体をアラジン1と命名。2010年に発表した。同教授がアラジン1を持たないマウスを作成し、アレルギーの原因を与えると普段よりひどい反応が出たという。

もし、アラジン1の働きを強力にし、肥満細胞全体の活性化を抑えられるような薬ができれば、アレルギーの原因が体内に入っても、アレルギーを起こす化学物質が肥満細胞から放出されない。その場合、この薬はアレルギーの特効薬となる可能性がある。現在のアレルギー治療は肥満細胞から放出される化学物質一つひとつに対して薬を使う「対症療法」だ。このため症状ごとに薬を飲み分ける必要があるのが難点だった。

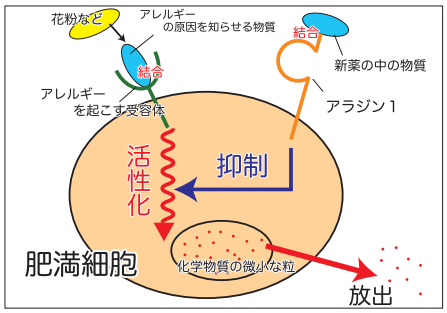
だが開発には障壁も多い。アラジン1を効果的に働かせるためには、アラジン1に強く結合して肥満細胞の活性化を抑制するきっかけを作る物質が必要になる。肥満細胞が活性化しないと、そもそも肥満細胞の動きをブロックするアラジン1が働き出さないからだ。現在は製薬会社と共同で新薬を開発している。

渋谷教授はもともと内科医。だが、医療の現場でその医学では治すことのできない多くの病気を見てきた。「根本的な研究をしなければ医学の進歩はない」。そう考え、研究の世界へ足を踏み入れた。

今後は薬の開発と共に、開発した薬を実用化する臨床研究も行っていく方針だ。「臨床研究は倫理的に難しい側面がある。少しずつステップを踏んで進めて行きたい」と渋谷教授は話る。

ちなみに「アラジン1」の名前の由来を渋谷教授はこう話る。「全てのアレルギーを抑えるよう願いを込め、アレルギーと『アラジンと魔法のランプ』をかけた。「魔法」のようにどんなアレルギーも抑え、アレルギーに苦しむ人がいなくなる……。その未来も遠くはないかもしれない。（中島佳奈＝人文学類3年）

◆受容体＝細胞の表面や内部にあり、特定の物質と結合することで細胞の機能に影響を与える器官。



アラジン1が肥満細胞の活性化を抑制する仕組み

卒業生からの手紙

あらゆる「縁」を大切に

私立富士見丘中学高等学校 教諭 久保誠一 さん

今年の卒業生から貴新聞への寄稿依頼があり、字数の制限に苦しんでいます。

大学に入学したのは昭和56年（1981年）です。共通一次の3年目でした。今は一発勝負の是非も言われ、受験界は大きく変化しようとしています。大学入試センター試験の廃止も新聞発表されました。

情報伝達の速度と汎用性は著しく進歩し、選ぶ側の責任が軽視され、権限ばかりが強調されてはいないでしょうか。選ばれる側の営業努力が今や世の中の当たり前となっています。私たちが入学したころは、全国から集った仲間たちが知り合う場は、県人会、サークル、研究室など限られていましたが、それぞれが付加価値も大変高かったと思います。昨今では、スマホで「つぐは」と入力すると、お節介なまでに無数のつながりが示されます。情報に飢えていた時代とは大違いです。

大切にすべきものは、筑波にこそあったし、今もあると信じています。ノスタルジーではなく、自然環境、教育そのもの、システムや伝統かもしれません。それゆえに、学生の皆さんには今を大切にしてほしいと願います。今気付くことはささいなか難しいことです。私はこれまで、多くの先輩・後輩の方々とお会いし、お仕事を一緒させていただきました。そんな中で、たくさんのご教示を頂き、同窓のありがたさを幾度となく痛感しました。私の人生の中でとても大切なものは「縁（えにし）」だと確信しています。教員としての私にとって、生徒たちとの出会いも素晴らしいものです。

不便さを全て排除して合理的に生きることは大切かも知れませんが、面倒なことや大変なことを乗り越えてこそ得られるものがあります。ぜひ、筑波大学の学生の皆さんにはグローバル化の最先端をこれからも走ってほしいと願います。卒業生の郷愁を受け入れつつ、時代をつくり、切り取っていく気概をいつまでも持ち、その炎を燃やし続けてください。皆様のご活躍を心より願っております。（昭和59年度体育専門学群卒）

筑波自然図鑑

◇ハッチョウトンボ◇

五円玉の直径と同じくらいのサイズで、世界的にも最小クラスのトンボである。彼らは草丈の低い湿地や環境良好な休耕田に生息するが、この大きさゆえ、トンボではなくアブのように見える。こんな小さなトンボでも発見の喜びは何にも代えがたい大きなものであり、泥まみれになりながら観察することが日課になってしまった。（写真・文＝武藤将道、生物3年、野生動物研究会）

僅差で敗北　今後の活躍に期待

東日本インカレ　女子バレー4位

積極的に気付けたことを指摘し合う選手たち

バレーボール全日本インカレへの出場権をかけた東日本インカレが6月20－23日に日本体育大学健志台第本記念体育館（横浜市青葉区）などで行われ、本学の女子バレー部は4位に入賞。12月の全日本インカレへの出場権を獲得した。

女子は2回戦以降、国士舘大に3－1、日本女子体育大に3－0、日本体育大に3－0で快勝。だが準決勝では青山学院大に1－3で敗れ、3位決定戦でも東海大に0－3で敗退した。（平嶋健人＝社会学類2年、坂本太郎＝同1年）

東海大との3位決定戦。山上彩（体専3年）が話すように、何より「粘り切れなかった」のが大きく響いた。第1セットは序盤から朝日優衣（同1年）や全日本代表でもある帯川きよら（同2年）らのスパイクが決まり、中盤まできっこうした展開が続いた。だが、結局22－25の僅差で落とすと、続く第2セットも連取される。そしてシーソーゲームとなった第3セットも22－25で惜敗。試合後、帯川は「緊張してしまい、自分らしいプレーができなかった」と振り返る。

選手たちは皆、「速さに対応できなかった」とも漏らした。東海大学のスポーツ新聞「東海スポーツ」の記者は、今大会の東海大について「春季リーグとメンバーを入れ替え、筑波大戦の対策を考えていた」と話したが、そんな東海大の速攻についていけなかった。

前日の準決勝。春季リーグの覇者・青山学院大との戦いでも、チームにとって一粘り強さ」が課題であることを露呈した。第1セットは、一時23－18で優位に立つが、24－24と追いつかれ、結局32－34で落とした。第2セットも中西康己監督（体育系・准教授）が「試合の流れを相手に手渡していた」と表現するように、単調なミスが相次いだ。このセットを15－25で落とすと、最終的には1－3で敗北。試合後、主将の杉山葵（同4年）は「第1セット以降、悪い流れを引きずってしまった」と悔やんだ。

だが苦しい展開が続いても選手たちの士気は高かった。3位決定戦前、選手らは口々に「気持ちを切り替えリベンジする」（山本彩香＝同3年）「反省を生かして絶対に勝ちたい」（塚田しおり＝同1年）と話した。準決勝前の4回戦で日本体育大に挑んだ時も、父兄の一人が「朝の練習から気合いが入っていた」と語っており、チームの今後には十分な期待が持てそうだ。（12面に関連写真）

観戦記

4位という結果だったが、筑波の躍進の可能性を感じさせる大会だった。中西康己監督（体育系・准教授）によると今期のテーマは「考えるバレー」。山本彩香（体専3年）が「やるべきことを自分たちで考えようと常に意識している」と話していたように、試合中、選手たちが自ら気がついたことをお互いに指摘し合っていたのが印象的だった。

監督は、タイムアウトも選手にほとんど指示を出さない。他チームの監督が、選手を大声でしかっていたのとは対照的だった。監督に呼ばれ受け身にならず、責任感を持ってほしいから」との明確な答えが返ってきた。

現場で取材していた「月刊ボレーボール」編集部の豊野堯さんは（3位決定戦では）1セットも取ることはできなかったが、良いプレーは多かった。選手おのおのの力が発揮されてきている」と筑波の成長ぶりを話す。また、3位決定戦で筑波を下した東海大のエース梅津結子は「筑波のブロックは高い。ブロッカーが二人いると、スパイクを決めるのが本当に難しい」と、その守りの強さをたたえた。

12月の全日本インカレに向けて、選手たちが自ら「考える」日々は今後も続く。（平嶋健人＝社会学類2年、森脇慎＝同1年）

第37回春季スポーツ・デー

8000人がスポーツ楽しむ　新競技にも参加者多数

第37回春季スポーツ・デーが5月18－19日に陸上競技場など学内の18カ所で開催された。このイベントは学生や教職員がさまざまなスポーツを楽しむもので、今回は2日間で計8181人が参加した。

当日はすがすがしい天気の下、イベントが開会。第1体育館や野球場では、ソフトボールやバスケットボール、ドッジボールなど、事前申し込みをしたチームのみが出場できる正式種目が行われた。

第2サッカー場で行われたソフトボール男子ビギナーズの決勝戦では、熱戦を繰り広げた。優勝したチーム「森田☆チローズ」は序盤にリードを許すも、後半で1回に6点を獲得。怒とうの追い上げを見せ、見事逆転勝ちを果たした。代表の清水司さん（生資2年）は「（優勝という）一つの目標に向かって皆で頑張ってきた。優勝できてうれしい」と喜びを語った。

陸上競技場や投擲場では、スポーツ初心者でも参加できる学生委員会企画種目「Sports Field」が行われた。この企画ではミニサッカーやミニバスケに加えて、水風船を相手に投げつけて戦う水合戦などのユニークな競技も用意された。

特に人気があったのは今回新たに加わった競技の一つ、追っかけ玉入れだ。ルールは、相手が背負っているかごがコートの中央に設置されているかごに玉を投げ入れ、その合計数を競うというもの。競技開始の合図と同時に参加者は玉を手にコートの中を駆け回った。ボールをかごに入れることばかりに集中しているとそのすきに背中のかごを狙われるため、参加者は攻めと守りの両方に苦戦した。参加した男子学生は、「意外と運動量が多く疲れたが、楽しかった」と満足そうな表情を浮かべた。

学生委員長の谷川大貴さん（物理3年）は「2日間とも天候に恵まれ、けが人も少なく無事に終えることができた。秋季もたくさんの人に参加してほしい」と話した。

第27回ユニバーシアード競技大会

永瀬が優勝果たす

西山は3位に入賞

柔道

第27回ユニバーシアード競技大会が7月7－11日にロシアのカザンで開催された。ユニバーシアードとは大学生のためのオリンピックのことで世界中の学生が集まり、競技を行う大会。本学の永瀬貴規（体専2年）が81キロ級で優勝し、西山雄希（同4年）が73キロ級で3位に入賞した。

永瀬は準決勝まで全て一本勝ちで、順調に決勝戦進出を決めた。決勝戦ではウズベキスタンのイマモフに大外刈で技有りを取得し、優勢勝ちを収めた。

西山は4回戦でポルトガルのアルベスに優勢負けをする。だが敗者復活戦でベラルーシのラマンチークに内股で一本勝ちをし、3位決定戦に進出を決めた。続く3位決定戦でもハンガリーのウンガバリに内股で一本勝ちを決め、3位入賞を果たした。

続く決勝戦では、ブラジルのメネゼスと対戦した。両者共になかなか技が決まらない中、メネゼスに指導が与えられ、優勢勝ちした。

ワールドマスターズ

遠藤が優勝

ワールドマスターズ2013がロシアのチュメニで5月25－26日に開催され、遠藤宏美（体専3年）が48キロ級で優勝を果たした。

遠藤は準決勝でモンゴルのムンクバットを相手に送襟締を決め、一本勝ち。

全国国立大学柔道優勝大会

9連覇を達成

第55回全国国立大学柔道優勝大会が6月30日に講道館（東京都文京区）で開催された。同大会は7人1チームの団体戦で、7試合の勝敗数で順位を決める。本学チームは決勝戦で埼玉大に6－0で勝利し、優勝。同大会9連覇を達成した。

本学は和歌山大と千葉大に7－0で快勝し勝ち進む。と、続く準決勝でも鹿屋体育大に2－1で勝利して決勝に進出。決勝では埼玉大を相手に、先鋒・新添悠司（体専1年）、次鋒・橋高海人（同2年）が共に内股で一本勝ち。本学チームは続く五将が優勢勝ち、中堅が引き分けと安定した展開を見せた。三将・黒岩貴信（同2年）が払腰で一本勝ちを収め本学の優勝を決めたが、副将・大将共に気を抜かず、それぞれ小内刈、合技で一本勝ちを収めた。

最終戦　惜敗で3位

野球

4月13日から平塚球場（神奈川県平塚市）などで行われていた首都大学野球春季リーグ戦が5月27日に閉幕した。本学は7勝5敗、勝ち点3で3位となった。

最終週に行われた日体大との1回戦では、初回に松浦昌平（体専4年）の内野安打で先制。この1点を先発の宮谷陽介（同4年）が守り切り、1－0で勝利した。しかし続く2回戦で敗れると、3回戦も打線がつながらず、1－2で惜敗。1位の日体大、2位の東海大に次ぐ3位に終わった。

関東学生陸上競技対校選手権大会

女子が21年連続総合優勝　男子も好成績残す

陸上

第92回関東学生陸上競技対校選手権大会が5月25－26日に、日産スタジアム（横浜市港北区）で開催された。女子は21年連続総合優勝を果たし、男子は惜しくも第3位に終わった。

女子は真下まなみ（体専4年）が800メートルで、春田亜沙美（同4年）が7種競技で1位になった。他にも知念彩子（同2年）が砲丸投げで2位に、世古和（同4年）が200メートルで3位に入賞するなど、各選手が好成績を収め、結果は総合優勝。21年連続23回目の優勝という前人未到の記録を達成した。

男子は嶺村鴻汰（同3年）が走り幅跳びで2位に、米原博章（同2年）が棒高跳びで3位に入賞するなど活躍を見せたが、優勝には届かなかった。

第74回管弦楽団定期演奏会

筑波大学管弦楽団の第74回定期演奏会が9月25日（水）にノバホール（つくば市吾妻）でと10月13日（日）にミューザ川崎シンフォニーホール（川崎市幸区）で開催される。

指揮者に小野田宏さん、チェロ独奏に羽川真介さんを迎え、山田耕筰作曲の「序曲ニ長調」、ドヴォルザーク作曲の「チェロ独奏曲ロ短調作品104」、チャイコフスキー作曲の「交響曲第4番ヘ短調作品36」を演奏。

つくば公演は17時45分開場、18時30分開演。チケットは全席指定1000円。川崎公演は12時30分開場、13時15分開演。チケットは全席自由で1000円。

茨城県警採用試験

平成25年度茨城県警察採用試験（第2回）の受付が7月1日から行われている。第1次試験は9月22日に実施される予定。

受付期間は、申し込み用紙を郵送・持参する場合は8月20日、インターネットから行う場合は8月19日17時まで。

詳細は、つくば中央警察署警務課＝029－851－0110、茨城県警察採用ホームページ＝http://www.pref.ibaraki.jp/kenkei/saiyo/ibarakipc_site/index.html

---

筑波大学出版会　近刊案内

感性認知脳科学への招待

筑波大学感性認知脳科学研究プロジェクト　編

「感性って何？」「こころはどこにあるの？」。誰もが抱くこうした疑問を解明するために、心理学、医学、障害科学、そして芸術学の研究者が集結して、学際融合的な研究分野「感性認知脳科学」が生まれた。本書では、感性認知脳科学において、これまでに進められてきた研究と教育の活動を、基礎から応用にわたって平易に解説する。本学大学院人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻担当教員（原稿執筆当時）17人による共同執筆。A5判並製、約220頁。9月上旬刊行予定。価格未定。

なでしこサッカー教室つくば

プロ選手と子供たちが交流する

子供たちにプロの技術を披露する安藤

安藤・熊谷選手らが直接指導

筑波大学開学40＋101周年記念事業の一環で、「なでしこサッカー教室つくば」が7月7日に第1サッカー場で開催され、子供たち約400人が参加した。

サッカー教室には本学生の安藤梢選手（体科3年）と熊谷紗希選手（体専4年）、「ヤングなでしこ」などで活躍している猶本光選手（同2年）が登場。更にサプライズゲストとしてドイツのアイントラハト・フランクフルトに所属するプロサッカー選手の乾貴士選手も登場した。

サッカー教室ではまず、乾選手がボールを蹴り上げて背中に乗せ、頭の上に移してから足に戻す、というように体を一周させるリフティングを披露。鮮やかなプロの技に子供たちからは歓声が上がった。

その後子供たちはチームに分かれ、選手らとミニゲームを行った。子供たちは選手とボールを追いかけたり、ハイタッチをしながらグラウンドを走り回った。熊谷選手はドリブルで10人抜きをするなど、子供たちに混じってプレーを楽しんでいる様子だった。

サッカー教室の後にはサイン入りサッカーボールなどの景品が用意されたじゃんけん大会と、選手らとの握手会が行われた。握手会では、7月9日に誕生日を迎えた安藤選手にバースデーケーキが用意され、子供たちが祝うというサプライズもあった。

つくば市大穂から子供と訪れた女性は「選手と間近に関われる機会は少なく、子供にとってとても貴重な経験になったと思う」と話した。また地元のクラブチームに所属する小学生の女の子は「選手と一緒にプレーできて楽しかった。またこんな行事があったら参加したい」と満足げな表情を浮かべた。（12面に関連写真）

ラグビー関東大学春季大会

逆転勝利しグループ2位
守備に課題残る結果に

ラグビー

第2回関東大学春季大会が4月28日から6月23日にかけて本学ラグビー場などで行われた。各大学はA、B、Cの3グループに分かれて戦い、本学は4勝1敗で、Aグループ中2位だった。

6月9日に行われた拓殖大戦は拓殖大学グラウンド（東京都八王子市）で行われ、41－31で勝利した。

前半は序盤に先制を許したが、12分に竹中祥（体専3年）がボールを奪い前進。パスを受けた高橋謙介（同4年）が独走し、トライを奪った。その後本学はもう1トライを決め、前半は14－5で終了。

後半は開始早々の7分に再度トライを許す。その直後、トライを許すかに見えたが、粘って相手の反則を誘った。すきを突いて高橋がボールを前方に大きく蹴り、自ら追いかけてトライ。その後一時は逆転を許したが、35分に山内俊輝（同2年）、39分に山本浩輝（同3年）が連続してトライを決め、本学の意地を見せた。

副将の粕谷俊輔（同4年）は「接戦を勝ち抜いたことは大きな成果だと思うが、守備には課題が見つかった。秋の選手権大会で日本一になるため、今後も妥協せずに練習していきたい」と語った。

関東大学オールスター

山本らが活躍

第1回関東大学オールスターゲームが7月7日、秩父宮ラグビー場（東京都港区）で行われた。この大会は、関東大学春季大会の対抗戦とリーグ戦で活躍した選手23人をそれぞれ選抜して行うオールスターゲーム。選手たちは対抗戦選抜チームとリーグ戦選抜チームとに分かれて対戦を果たした。本学からは、山本浩輝（体専3年）と竹中祥（同3年）が選ばれ先発出場。

試合は対抗戦選抜チームが55－28で圧勝。前半12分に竹中がトライを決め、山本が体を張ったプレーを見せるなど活躍を見せた。

ラグビー日本代表

内田・福岡が選ばれる

ラグビー日本代表に、本学ラグビー部から内田啓介主将（体専4年）と福岡堅樹（情科2年）が選出された。現役の大学生では、二人の他に中村亮土（帝京大4年）と藤田慶和（早稲田大2年）が選ばれた。

本学の二人は4月下旬から7月上旬まで約3カ月間日本代表の合宿に参加。その期間に行われた「HSBCアジア5カ国対抗2013」や「IRBパシフィック・ネーションズカップ2013」などの大会にも参加し、世界の強豪国と戦った。

中でも6月8－15日に近鉄花園ラグビー場（大阪府東大阪市）などで行われた「リポビタンDチャレンジ2013」では、強豪の鉄壁ウェールズ代表と対戦。福岡が選抜出場し、第1戦目は惜しくも18－22で敗れたが、第2戦目は23－8で勝ち、通算13回目の対戦で初勝利を挙げた。

二人は代表戦の多くの試合に出場。特に福岡は俊足を生かしてトライも決めるなど活躍した。

日本代表チームで経験を積んだ二人。本学チームへの貢献にも期待がかかる。

松倉特任助教ら研究グループ

キーパーのジャンプを分析
両足の異なる役割を明らかに

サッカーのゴールキーパーが横方向にダイビングする際、垂直方向にジャンプをする時とは異なり、両脚が別々の役割を果たしていることを松倉啓太特任助教（体育系）と浅井武教授（同）らの研究グループが明らかにした。

実験では本学サッカー部のゴールキーパー11人を被験者とし、ボールの高さやゴールからの距離を変えて彼らのダイビング動作を分析。垂直方向の両脚ジャンプでは両脚に均等に力を込めるのに対し、横方向のダイビングでは、ボールから遠い脚に力を込め、近い脚が方向をコントロールしていることが分かった。

今回の研究結果から、両脚それぞれの役割を意識して地面から離すタイミングを考えれば、ダイビング技術の向上が期待できるという。松倉特任助教は「今回の研究結果には競技者だけでなく、観戦者にも興味を持ってもらいたい。ゴールキーパーのダイビング動作に着目することで、更にサッカー観戦が面白くなる」と話した。

バスケットボール新人戦

男子ベスト16入り
点差つめ切れず

バスケ

関東大学バスケットボール新人戦が5月25日から6月24日にかけて、国立代々木競技場第二体育館（東京都渋谷区）などで開催され、男子はベスト16入りとなった。

男子は6月13日にベスト8をかけて日本大と戦った。前半は日本大が外角シュートを中心に得点する一方、本学は相手のディフェンスを前に、なかなか得点が決まらなかった。後半で一時的に流れをつかむも、点差を縮めることができずに46－66でタイムアップ。11日の埼玉大戦と合わせて1勝1敗の結果となった。

女子は6月15日に松蔭大と対戦。早坂彰恵（体専2年）が17得点を挙げるなど活躍を見せたが、接戦の末に50－53で惜しくも敗れた。

体操全日本種目別選手権

星野 ゆかで5位
他選手は奮わず

体操

第67回全日本体操種目別選手権が、6月29－30日に東京体育館（東京都渋谷区）で行われ、星野維（体専1年）がゆかで5位に入賞した。

星野は予選で14・850点を記録し、4位で決勝に進出。決勝戦でも14・950点という高得点を獲得し、5位に入賞した。本学からは他にも佐野智樹（同2年）があん馬、菅野惠（同4年）が平均台、小山愛（同3年）が跳馬と平均台にそれぞれ出場したが、決勝進出はならなかった。

今大会は実力を発揮できなかった本学勢。8月の全日本学生体操競技選手権大会での活躍に期待したい。

顔

基本の積み重ねを自信に

昨年のインターハイ剣道個人で優勝

森田れい子（体専1年）

「私はセンスがない。だから人一倍努力しないと勝てないんです」。そう言い切るのは昨年の全国高校総体の剣道女子個人のチャンピオン、森田れい子（体専1年）だ。

兄の影響を受け、6才で剣道を始めた。初めての習い事が剣道で「始めた時から好きだった」という。小学3年生の時、初出場した大分県大分市内の大会で優勝し「どんどん強くなりたい」という気持ちが芽生えた。小学6年生の時には県大会で優勝。順調な剣道人生が始まったかに見えた。

しかし、中学校に進学した当初、大会で思うような結果が残せず、苦悩した。そんな時、「剣道は率にあいさつし、ごみが落ちていれば必ず拾う……。そんな「基本的なこと」の積み重ねが剣道への自信につながり、中学3年生の県大会では優勝。実力を取り戻しながらも、勝負所で負けてしまい、高校の2年間は全国大会に行けなかった。努力を怠らない生活を送ってきたが「努力しても限界があるのか」と思った。「何かに打ち込むことは気持ちが良いが、つらいことも多い」。2年生の終わりごろには「インターハイ後に剣道をやめよう」と心の中で決めていた。

そして主将として迎えた高校3年生のインターハイ予選。「勝とうと思うのでなく、力を出し切ることだけ考えよう」と、プレッシャーを感じる部員たちに諭した。それは彼女自身が2年間の経験から学んだ教訓であった。その言葉が部員たちの力を引き出し、団体で5位に入賞。自身も個人戦で見事優勝を果たした。

優勝した直後、厳しかった小学校の剣道の顧問が、電話越しに泣いて喜んでくれたのがうれしかった。たくさんの人におめでとうと言われ「剣道をやっていて良かった。努力は実を結ぶんだ」と、心から思った。普通の高校生のように遊びたいとも考えていたが「剣道で周りの人に喜んでもらえる方がうれしい」と気づき、大学でも剣道を続けることを決めた。

だが、彼女の前にはまだも困難が立ちはだかる。現在、アキレス腱を切るけがを負い、練習が数カ月できない状態だ。けがをした瞬間は「これまでの努力が全部無駄になる不安」もあった。しかし、先輩や監督、同級生に励まされ、前向きに立ち上がろうとしている。

「大学は剣道に専念できる場所。だから精一杯がんばりたい」。彼女の強い精神力は、けがに打ち勝つに違いない。夢は世界一。ひたむきな努力を続ける彼女に、神様はきっとほほ笑むことだろう。（平嶋健人＝社会学類2年）

世界の教室から

学問の奥深さを実感

オーストラリア国立大学（オーストラリア）
岡幸穂

私は今年の2月から、開発学を学ぶためにオーストラリア国立大学（ANU）に交換留学している。初めての海外での大学生活は、想像以上に毎日が貴重な学びの連続だ。無事に1学期を終え、書きたいことは山ほどあれど、ここではキャンベラの紹介と、授業を受けての感想について簡単に書いていきたい。

ANUは、オーストラリアの首都キャンベラに位置する。シドニーとメルボルンの間を取って建設された首都のキャンベラは、政治的中心地ではあるが経済的には小規模で、自然豊かな落ち着いた町である。（ちなみに今年はキャンベラ首都100周年。夜にはキャンパスに野生のカンガルーが出没することもしばしば。慶應義塾大学やソウル大学から来た交換留学生仲間はキャンベラの刺激の無さに物足りなげだが、筑波大学生の私としては大変親しみと安心感を覚えた。キャンベラは間違いなく勉強にはもってこいの場所だ。

オーストラリアの自然を背に

大学の授業は、厳しくも、どれも大変面白く充実している。1科目は、大抵週2時間の講義と1時間のチュートリアル（少人数のディスカッション）から構成される。授業を受けての印象は、とにかく学生が活発だということ。授業中もチュートリアルでも皆よく発言し、その内容もとても的を射ている。意見を求められてもなかなか発言できない私は、いかに自分が自分の頭でものを考えていないかということを実感させられた。

定期的に課されるレポートの課題でも、幅広い調査に基づいたクリティカルな議論が求められる。非母語話者として授業についていくのは簡単ではないが、ANUに来て私は開発学の本当の奥深さに気付かされた。また、ネイティブと同じ舞台で課題をこなすことも、自分にとって大きな自信につながっている。

1年間の交換留学には、短期研修以上にその国の実情を知り、学問も充実させることができるという良さがある。1学期の反省を生かし、来学期はANUでの限られた時間を更に実りあるものにしていきたい。（国際総合学類3年）

忍び込み犯逮捕

連続発生は沈静化へ

居住者が寝ている間に部屋に入り込む「忍び込み」という手口での侵入窃盗事件に関連し、つくば中央署が6月11日、つくば市吾妻の小規模マンションを対象とした忍び込み事件の連続発生で住む元アルバイト吾妻の男（23）を住居侵入で現行犯逮捕していたことが分かった。男は「犯行のきっかけは居室内にいる女性を覗き見たこと」などと話しているという。オートロックマンションを対象とした忍び込み事件は昨年6月ごろから本学周辺で多発しており、今年6月までに約35件発生。被害者は一人暮らしの女子学生ばかりだった。同署で、一連の事件との関連を調べている。

男は11日未明、つくば市春日地区のオートロックのマンションで無施錠の個室に侵入。だが寝ていた女子学生が気付いて大声を出すとその場から逃走し、マンションから出たところを、忍び込み事件の連続発生で警戒中の警察官に見つかり、逮捕された。同署によると男の逮捕後、現在までつくば市周辺での忍び込みによる犯行は起こっていないという。

忍び込みによる一連の事件のほとんどは、本学周辺の天久保地区や春日地区で発生。正面玄関がオートロックのマンションばかりが狙われた。また侵入されたのはいずれも一人暮らしの女子学生の個室だったが、これらの被害者はオートロックに「過信」する形で、自室の入り口や、ベランダのカギをかけていないケースが大部分だった。

犯行はすべて早朝に行われており、犯人はマンションの正面玄関を使わず、塀などを乗り越え建物内に侵入。玄関などが無施錠の部屋を見つけて入り込み、財布やかばん、パソコンなどの金品を盗んでいた。手口や犯行地域・時期が共通していることなどから、同署では同一犯の可能性が高いとみて、厳戒態勢を敷いていた。

同署は今回逮捕された男の犯行について「場合によっては重大犯罪に発展した可能性がある」として、犯行の全容や動機の解明を急いでいる。また、主に付近に住む女子学生に対して、引き続きマンション入り口のオートロックの有無に関わらず、自室の施錠を徹底するなど「事件が起こりにくい環境づくり」を呼びかけている。

つくばクラフトビアフェスト2013

自然の中でビール 音楽と共に味わう

県内外の地ビールが集まる「つくばクラフトビアフェスト2013」が5月24―26日、つくばセンター広場（つくば市吾妻）で開催され、3日間で約1万人が来場した。

同イベントは本学生が中心のつくばクラフトビアフェスト実行委員会が主催するもので、昨年9月に続く2回目の開催。今回は前回よりも多い20社のビール醸造所と13社のレストランなどが出店し、来場者はビールを飲み比べて楽しんだ。同実行員会によると、茨城県の「シャトーカミヤ」と千葉県舞浜の「ハーヴェスト・ムーン」のビールが人気だった。

また、会場に設けられた二つのステージではときめき太鼓塾などが演奏を披露し、来場者はビール片手に聞き入った。来場したつくば市在住の男性は「『みちのく福島路ビール』がおいしかった。さまざまな団体の演奏を聞くこともできて楽しかった」と話した。

ビールを楽しむ来場者

大学院生で実行委員長の明田川育生（なるお）さん（生環1年）は「つくばは自然が豊かなので、ビールを外で飲むイベントを企画した。反響が大きかったので今後も続けていきたい」と振り返った。

リレー・フォー・ライフ

夜通し歩きがん啓発 がんへの意識深める

がん患者の支援とがん啓発のためのチャリティーイベント「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2013茨城」が、5月18―19日につくば市研究学園駅前公園（つくば市竜城根崎）で行われた。がん患者69人とその家族、支援者などが交代で夜通し歩き続け、がん検診の受診やがん患者支援のための寄付を呼びかけるもの。日本対がん協会と茨城県内の学生など合わせて約600人が参加し、500㍍のコースを400周、交代で歩いた。

がん患者の支援を呼びかける参加者

同イベントは、がん患者とその家族、支援者などが交代で夜通し歩き続け、がん検診の受診やがん患者支援のための寄付を呼びかけるもの。日本対がん協会とリレー・フォー・ライフ・ジャパン茨城実行委員会が主催し、本学とつくば市の共催で行われた。

参加者は「がんの検診を受けよう」「みんなの希望をつなげよう」などのメッセージが書かれた横断幕を持ち、声援を受けながらコースを歩いた。夜になると沿道のイルミネーションが点灯。闘病中の人や、がんで亡くなった患者へのメッセージが浮かび上がった。

18日の夜には会場のステージで、がん患者が自身の経験を話すサバイバートークが行われた。がんの闘病経験がある5人と、両親をがんで亡くした一人が、がんを告知された際の心境や、共にがんと闘っている医療従事者への思いを吐露。参加者は真剣な面持ちで、彼らの言葉に耳を傾けていた。

実行委員長の宮本恭子さんは「多くの学生が参加してくれてうれしかった。この経験がいつか役に立てば良いと思う」と語った。

TSUKUBA∞

自身の経験を交え講演 学生の使命を問う

8人の講演者がプレゼンテーションを行うオムニバス講演会「TSUKUBA∞（EIGHT）」が、7月6日に大学会館ホールで行われた。

3回目となる今回は「Mission」というテーマで永田恭介学長や、落語家の立川志のぼんさんら8人が講演。自身の経験談を交えながらそれぞれが考える学生の使命について語った。

航空自衛隊に勤務した経験を持つ山本晃平さん（数物3年）は、自身の留学の経験や友人を100人作った学群生時代を語った他、招待した友人数人と共に講演を締めくくった。

立川志のぼんさんは落語を一席披露した後に講演。「使命というものは誰かに言われるものではなく、自身が見つけるもの。自分なりに使命を見つけてほしい」と学生にエールを送った。

最後の講演者となった永田学長は自身が携わったウイルスの研究について発表した他、「自身の行動を決める際、何を基準にするか考えてほしい」と投げかけた。また講演後には、無類のサッカー好きという永田学長へのサプライズゲストとしてなでしこジャパンの熊谷紗希さん（体専4年）と安藤梢さん（体科3年）が駆けつけ、会場は盛り上がった。

講演会終了後には質疑応答が行われた他、参加者が自分の意見を書き込んだ紙を掲示板に貼った。

来場者からは「いろいろな人の経験談が聞けて楽しい」「やらなければとは思っていても行動できない人が多い中で、山本さんのように実際に行動できる人はすごい」「来年もぜひ参加したい」といった声が聞かれた。

女子学生狙い 図書館で犯行

6月初旬から、中央図書館内で女子学生を狙った覗きなどの事件が相次いでいる。中央図書館には注意喚起のトイレや掲示板に注意喚起の文書を掲示し、職員が館内を巡回するなどして対応している。

6月5日の15時45分ごろ、中央図書館4階の女子トイレで女子学生が個室に入っていたところ、隣の個室に隠れていた男に上から覗かれる事件が発生。女子学生が叫んだため、犯人は逃げ出した。目撃者などによると、犯人は身長160㌢前後で、図書館をよく利用している男性だという。

6月17日の14時ごろには、同館4階の学習スペースで仮眠中の女子学生が体を触られる被害にあった。

学生生活課の担当者は「このような事件は）図書館に限らず、学内の至る所で起こりうることなので注意してほしい」と話した。

研究談話会

映像による音楽表現 自身の声も作品に

図書館情報メディアの研究に関わるテーマで、専門家が講演を行う研究談話会（主催・知的コミュニティ基盤センター）が、5月23日に7B棟310で行われ、学生や教職員ら約30人が訪れた。

101回目となる今回は「テクノロジーと音楽表現の狭間で」と題し、コンピュータなどを使って音楽、映像作品を制作する、音楽家の美山千春さんが講演した。

講演会では美山さんが製作した映像と音楽を組み合わせた3作品を紹介。それぞれの作品のコンセプトや使われている楽器、製作者の意図などを説明した。自身の声を録音・編集し、作品に取り入れていることを紹介すると、会場からは驚きの声が上がった。このうち「Quicksilver」は水銀をイメージして作られた作品で、人のうめき声に合わせて、水銀のような液体が揺れる映像が映し出された。美山さんは、液体と固体、白と黒、音と沈黙など、コントラストを意識した作品を作った」と語った。

キャンパスツアーにセグウェイ

全国初の導入で関心高める

一人用の立ち乗り型モビリティロボット「セグウェイ」の体験乗車プログラムを取り入れたキャンパスツアーの第1回目が、6月12日に石の広場で行われた。キャンパスツアーにセグウェイを導入するのは、全国で初めての試みだ。

本学は、今年3月にセグウェイを2台購入。筑波キャンパス構内はモビリティロボットの公道走行実験が認められる「つくばモビリティロボット実験特区」に指定されており、今回のプログラムは実験の一環として開始した。セグウェイはキャンパスツアーの他にも職員の業務移動などに使用する予定で、12人の職員がインストラクターの資格を取得し、安全に指導できる体制を整えた。

12日のキャンパスツアーでは埼玉県立春日部高等学校の生徒23人が学内見学終了後にセグウェイに乗車。職員の指導の下、図書館前の広場を走行した。

セグウェイの導入を推進した広報室の鈴木保さんは「セグウェイの体験乗車プログラム導入を機に、高校生が本学に関心を持ってくれたら」と期待を寄せる。

職員の指導を受けながらセグウェイの体験乗車をする高校生

国際・文化講演会

日本語の危機訴える 消滅防ぐ対処法提案

国際・文化講演会「グローバル化の中で今、日本語が危ない！？～言語と国民の安全保障を考える～」が6月8日にイーアスつくば（つくば市研究学園）で開催された。会場には市民ら約50人が訪れた。

講演したのは本学の津田幸男教授（人社系）。同教授はます、ファストフード店の看板やテレビコマーシャルなどを例に挙げながら、英語がはんらんしている現在の日本の状況を説明。グローバル化に伴い、英語が国際公用語として重要視され、日本語が身の回りから徐々に消えつつあると訴えた。

また、このままグローバル化が進むと、英語を話すことのできない人が、英語を話すことのできる人に比べて、コミュニケーションを取りづらくなるという弊害を指摘し、日本語を守る必要性を主張した。

日本語の消滅を防ぐ対処法としては、国内の外国人に日本語を使わせることや日本語中心の教育の確立、日本語を保護する法律の制定などが提案された。

講演の最後に津田教授は、「日本語なくして日本はありえず、子孫に日本語を伝え続けるべきだ」と力強く語った。

つくば市内から訪れた野田哲朗さんは「津田先生の日本語に対する視点に新鮮さを感じた」と語った。

ドイツデー

100人がドイツに親しむ 留学相談やパーティーも

ドイツに親しんでもらうためのイベント「ドイツデー」が5月29日に1C棟310と1D棟204で開かれ、会場には教職員や学生が約100人訪れた。

イベントは本学とドイツ学術交流会（DAAD）東京事務所の主催で行われ、始めにドイツ映画の「ベルリン・天使の詩」が上映された。これはドイツを舞台に天使と人間の恋愛模様を描いた作品で、来場者はドイツの美しい風景に見入った。

その後は本学と同国に馴染みの深い人による講演会が行われ、冒頭、在東京ドイツ大使館公使のクラウス・アウアーさんが「ドイツと日本の交流」というテーマで講演。2011年にドイツのヴルフ元大統領が本学を訪れ、名誉博士号を授与されたことに触れると共に「本日訪れた学生には、日独交流が盛んになっていることを実感してほしい」と語った。

ドイツと日本の交流について語るアウアーさん

第1部では本学ボン事務所長の松村明教授（医学医療系）が、同国への留学支援活動について紹介。続いて、DAAD東京事務所長のホルガー・フィンケンさんがノーベル賞受賞者の多さや高度な産業、国民の多様な価値観など、ドイツの強みをアピールし、ドイツへの留学を強く勧めた。

その後、加藤澤男名誉教授とマルティン・ポール准教授（人社系）が、自身の同国での体験などについて講演。加藤名誉教授は学生時代にドイツへ留学した経験を振り返りながら「その国の文化を理解するためにはその国の言語を知ることが必要だということを噛み締めた」と語った。

第2部では本学と国際交流協定を提携した同国の大学が紹介され、また各校に留学した学生が自身の体験について語った。

講演会終了後は1A棟の喫茶店「スープファクトリー」で留学相談会とパーティが行われ、来場者にはドイツソーセージやビールなどが振る舞われた。訪れた学生は「ドイツをより身近に感じることができた」と話した。

水泳部員が飲酒後死亡 未成年飲酒の指導強化へ

本学水泳部の学生（18）が7月7日夜、同日昼に行われた水泳大会の「打ち上げ」で酒を飲んでいる最中、体調が急変し、死亡した。学生は5月の健康診断で不整脈が発見されていた他、一部種目に欠場。つくば中央署では病死と断定した。

一方、未成年者の飲酒に対して本学は「今後とも飲まないよう厳しく指導していく」としている。

大学側の発表や同署への取材によると、同日の第64回茨城県選手権兼県民総体兼第68回国体選手権の終了後、午後7時30分ごろから、この学生のアパート自室で未成年者4人を含む水泳部の競泳チーム15人で打ち上げを行った。この際、学生は紙コップでビールや梅酒を7～8杯飲んだ後、気分が悪くなり嘔吐。周りの学生が心臓マッサージなどの措置を行った後、救急車を呼んだが、8日未明に死亡が確認された。

学生の様子が急変してから救急車を呼ぶまでの時間は約30分で、飲酒の強要はなかったという。

大学側によると学生は同大会50㍍自由形に参加後、立ちくらみを起こし、予定された別の種目の出場を取りやめていた。また不整脈については6月に精密検査を行い、今後、再検査を行う予定だったという。学生は昨年度のジュニアオリンピックで決勝進出するなどの有望選手だった。

本学では近年、飲酒に関する注意喚起を開始。課外活動団体の責任者への講習会開催や、新入生へのアルコールパッチテストなどを行ってきた。この結果、本学での急性アルコール中毒による搬送件数は減少しており、昨年度の未成年飲酒による搬送は4件だという。水泳部の競泳チームは当面活動を自粛する方針。

歌留多部

緊張感高まる勝負の世界

「筑波嶺の峰より落つるみなの川――」。朗々と短歌を読む声が、文化系サークル館1階の和室から聞こえる。部屋の入り口に掲げられた「歌留多部」の看板に雅なイメージを抱いてふすまを開けた人は、和室に似合わぬジャージ姿の学生たちを見て驚くだろう。「試合はほとんどジャージを着て行います。競技かるたは文化系といえども、スポーツと同じく真剣勝負ですから」。部長の千葉椎奈さん（人文3年）は笑顔で出迎えてくれた。

競技かるたは、小倉百人一首の100枚のうち50枚の札を用いて行う。競技者は読み手が読む上の句を聞き、畳に並べられた下の句の札を払う（取る）。先に25枚を払った人が勝利するというルールだ。1試合は並べられた札の暗記時間（15分）を含む約1時間半で、長時間の集中力が必要となる。

歌留多部は毎週火・木・日曜日に活動している。普段は部員同士で試合を行うが、日曜日は学外の試合に出かけることも多い。講師は招かず、上級生が下級生に技を指導する。理系の学生も多く、学問分野や学年を超えて親しく交流している。常に笑いが絶えないアットホームな環境だ。

だが、和やかな雰囲気も、試合となれば一変。試合前の暗記時間は札から目を離すことはない。試合開始2分前になれば、競技者らは一斉に畳を叩き「素振り」を始める。「パシッ」と畳を叩く音が響くと、室内に試合直前の緊張感が走る。

試合が始まれば、和室の張り詰めた空気に、息をすることすらはばかれる。読み手の声に耳を澄まし、上の句の最初の文字が発音されるやいなや、体を投げ出して札を払う。「極限まで緊張感を高め、一気に札を払う瞬間は快感です」と競技かるた歴9年の主将・青山希さん（医療3年）は魅力を語る。「競技かるたを続ける中で『この人には勝ちたい』と思う相手が見つかれば、試合がどんどん楽しくなる。競技に対する情熱をのぞかせた。

同じ真剣勝負でも、スポーツの試合と異なるのは、声を出しての応援が厳禁であること。「心の中でしか応援できないのはもどかしい。だが、仲間の勝利を信じているから静かに見守ることができる」と部員らは話す。部員は良きライバルであり、大切な仲間。戦いは一人で行うが、部員同士の信じあう「絆」が支えだ。

現在は8月の全国大学かるた選手権大会に向けて腕を磨いている。3月の全国大会での成績は4位。（同大会で）優勝した大学との試合で勝利したが、結果的に優勝を逃してしまった。今年こそは優勝する。主将の青山さんは力強く語った。

文化系サークルには珍しい「競技」の部活動。張り詰めた緊張感と札を払う力強い音に、部員たちが情熱を注ぐ勝負の世界がある。（望月麗＝比較文化学類2年）

Who's Who?

「リア充コート」の製作チーム

大森舞人さん 進林昂太さん 杉浦光さん

（工シス 2 年次）

コートを着た大森さん（左）と進林さん（中央）、杉浦さん（右）

駅の雑踏の中、背後から聞こえてくる足音。腰に手が回され、ぎゅっと抱き締められると、耳元で「ごめんね、待った？」と一言。大好きな彼女にそう言われたいと願う男性は多いだろう。そんな夢をかなえる装置「リア充コート」が大きな反響を呼んでいる。製作したのは大森舞人さん（工シス 2 年次）、進林昂太さん（同）、杉浦光さん（同）の 3 人だ。

高校時代、進林さんはプログラミングやソフトウェアに、杉浦さんはロボット製作などに興味があり、本学に進学。漠然と「ものづくりがしたい」と思っていた大森さんと大学後に知り合った。その後 3 人は「コンテンツ工学システム」という、ものづくりの技術や企画力、表現力を養う授業を履修。「現実（リアル）」の恋愛や生活が「充実」しているという意味の「リア充」をコンセプトに装置を作ることに決めた。議論の末に「リア充」気分を味わえる「後ろから抱きつかれるコート」の案を採用。「リア充コート」の名前はこの時点で名付けられた。

リア充コートは背中に取り付けられたモーターが「彼女の腕」の役割を持つ 2 本のパイプをベルトで引くことで、腰の辺りを締める仕組みで、動力は単 3 電池 4 本。パイプは女性の腕の長さと太さの平均値を元に作るなど、可能な限り本物に近づけた。また、コートに付属するヘッドホンから聞こえるせりふはプロの声優に依頼したもので、「だーれだ？」「スキあり！」など 20 種類以上。せりふだけでなく、駅の雑踏や駅付き寄ってくる足音も聞こえるというこだわりぶりだ。材料の用意からプログラミングまで全てを 3 人で行った。製作期間は約 4 日、予算は 2 万円とコストを抑えたため、パイプがむき出しになっているなど安っぽい見た目だが「妄想でいくらでも補える」と杉浦さん。記者も体験したが、女性の腕の感触に想像以上に近く、思わずほおが緩んでしまった。

製作の過程では虚しさがつきまとった。3 人のいずれも女性と付き合ったことがなく、女性に抱きしめられる感触が分からない。それでもその感触を再現すべく、何度も互いの背中を抱き締めた。「本物の感触」を追求する思いが強いあまりに、話し合いでは声が飛ぶことも。「面白いものを作りたいから本気で言い合った」と大森さん。だからこそ完成した時の喜びは大きかった。「皆で着回して『それっぽい！』と大はしゃぎした」。世間はクリスマスムード一色の 12 月、深夜 3 時のことだった。1 月中旬に授業で発表すると、教室は歓声に包まれた。

杉浦さんが知り合いに勧められ、リア充コートの紹介動画をインターネットの動画サイト「ニコニコ動画」に投稿。「どうせ友達しか見ないだろう」という予想に反して、再生回数は 1 週間で 10 万回を超え、世界各国で大きな反響を呼んだ。カナダのディスカバリーチャンネルの取材も受けるなど、3 人は一躍有名人に。国内外の新聞社やテレビ局の取材を受ける中で、進林さんは「リア充コートが一種の仕事になった気がする」と苦笑いを浮かべる。

一方、杉浦さんは「想像以上の反響だったが、さまざまな人に見てもらえてうれしい」と誘らしげだ。注目を集めたリア充コートだが、次回作や特許申請、製品化の予定は無く、作り方やプログラムは公開する予定だという。

リア充コートの製作は 3 人にとって、出発点に過ぎない。だが、仲間とものづくりに打ち込み、人々を楽しませたこの経験が、彼らを「リア充」に一歩近づけたのかもしれない。（原啓一郎＝社会学類 3 年）

電池 4 本で「リア充」に ものづくりの楽しさ実感

編集後記

夏、襲来―。編集期間突入と同時に梅雨が明け、連日の真夏日が部員を襲いました。クーラーの効いた編集室と、蒸し風呂のような屋外の温度差に悲鳴を上げる部員が続出。これからどこまで暑くなるのでしょうか。

総勢 11 人の新入記者を迎え、部員は倍増。熱い思いを持って私たちの指導についてきてくれています。その一方で、編集期間中に誕生日を迎えた部員にサプライズを企画する、お祭り好きな一面も。にぎやかな笑い声に、暑さも吹き飛びました。

今回は「Who's Who？」を書きました。編集長の仕事はもちろん、記事を書くのも楽しいです。この調子でインターンのエントリーシートも書ければいいのにと、就活特集を書きつつ苦笑い。私の就活は、志望業界の取材から始めるとします。（編集長・原啓一郎＝社会学類 3 年）

次号は **10 月 7 日（月）** 発行予定です

100 万人のキャンドルナイト

学芸

キャンドルに囲まれて歌う本学生

3 面へ

第 39 回宿舎祭

ミニ特集

前夜祭で輝く美しい火文字

5 面へ

東日本インカレ

スポーツ

力強いスパイクを放つ本学選手

8 面へ

なでしこサッカー教室

スポーツ

子供にプレーを教える安藤（左）

9 面へ